

九大広報

Kyushu University Campus Magazine

vol. 54
2007.11

大至宝

記録資料館
九州文化史資料部門蔵
福岡城下町・
博多・近隣古図

インタビュー・シリーズ九大人

海老井悦子 福岡県副知事

研究・ふろんとランナー

『ガリレオの迷宮』で毎日出版文化賞

高橋憲一 比較社会文化研究院 教授

研究 一最近の話題から



モノが伝える歴史と未来

Kyushu University Great Treasure VOL.4

大宝 九至



表紙写真説明

福岡城下町・博多・近隣古図

記録資料館九州文化史資料部門蔵

「三奈木黒田家文書」四二三号

福岡藩家老であった三奈木黒田家には、文化九年（一八一二）に写された「福岡城下町・博多・近隣古図」（絵図に名称は記されていない。仮題）が残っている。これには、和歌なども書き込まれ、福岡・博多の歴史や文化に関する豊富な記述があり、侍屋敷には居住者の名前、さらに一部には石高や家紋まで書き込まれている。

この絵図は、江戸時代の景観を伝えるものとして、何度も絵図集に取り上げられてきたが、絵図は縦二二三・二cm×横二六六・五cmの大きさであり、原寸大でなく、縮小されて印刷されたため、一〜二mmの小さな文字で書かれた地名などを読むことはできなかった。デジタル技術の進展により、インターネット上 (<http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/kochizu/joka/minagi.html>) で自由に拡大・縮小できるようになった。

（総合研究博物館准教授・宮崎克則）

九大

Kyushu University Campus Magazine

広報

54

vol. 54
2007.11

編集発行 九州大学広報専門委員会
 事務 九州大学総務部広報室
 住所 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1
 電話 092-642-2106
 F A X 092-642-2113
 E-mail koho@jimu.kyushu-u.ac.jp
 U R L http://www.kyushu-u.ac.jp
 印刷 アイメディア株式会社



お読みになってのご感想やご意見をお待ちしています。
 投稿をお受けします。文字数は、300字未満。手書きのものも受け付けますが、できればテキストファイルのフロッピーディスク又はEメールでお送りください。可能な限り掲載しますが、本誌の目的や性格に照らして不適当と思われる原稿は掲載しません。
 九州大学関係者が本誌記事を転載する場合は、「九大広報第 号から」と明記してください。学外の方は、事前に事務までご連絡願います。
 「九大広報」は九州大学ホームページでもお読みいただくことができます。
 次号は、2008年1月発行予定です。

インタビュー・シリーズ九大人 福岡県副知事 海老井悦子 ……………	3
シリーズ研究・ふるんとランナー 『ガリレオの迷宮』で 第六十回毎日出版文化賞受賞 比較社会文化研究院教授 高橋憲一 ……………	9
研究―最近の話題から 先端融合医療レドックスナビ研究拠点…………… 次世代研究スーパースター養成プログラム…………… 東アジア環境問題プロジェクト…………… 九州電力(株)との環境プロジェクト開始…………… ネイチャー、サイエンス誌に掲載された 研究者たち…………… 核融合への教育研究で日仏五機関が連携……………	13 15 17 19 21 22

ニュース 大学サミット・イン・九州二〇〇七…………… 光と水の伊都未来都市構想…………… 源田教授が外務省主催事業で講義…………… 第四回S I A - DAY開催…………… 加河准教授がレオンチエフ記念賞を受賞…………… 学生グループが日本建築学会最優秀賞…………… 女性研究者支援室の話題…………… 学生によるスーダン訪問記…………… 糸島会が地引網とバーベキュー大会…………… 同窓会の話題/東京同窓会・学生寮同窓会…………… 二人の化学研究者に栄誉…………… ようこそ九大へ……………	23 25 25 26 27 27 28 29 29 31 33 33
--	--

告知板 九大と北大との合同活動報告会…………… 新聞で報道された九州大学 平成十九年八月〜九月…………… 九大生が案内する世界のキャンパス ウブサラ大学スウェーデン…………… こんな本出しました 音のデザイン ここ 食卓から始まる生教育…………… 編集後記……………	34 35 37 38 38 38
---	----------------------------------

九大人が伝える

進化文化の 子伝遺

シリーズ九大人
インタビュー



福岡県副知事

海老井悦子

えびい
えつこ

今回ご登場いただくのは、福岡県

副知事の海老井悦子さんです。産休代替教員として教壇に立ったのがきっかけで高校の先生になり、福岡中央高校の校長だった平成十八年三月思いがけなく要請を受け、同年四月福岡県副知事に就任。校長先生時代からお付き合いのあった武谷教授が最後にはかつての教え子も参加して暖かな雰囲気インタビューになりました。

このインタビューは、平成十九年十一月二日（金）、福岡県庁で行われました。

聞き手

武谷 峻一（たけや・しゅんいち）

高等教育開発推進センター教授
（アドミッションセンター兼務）

海老井 悦子 福岡県副知事
プロフィール

昭和四十年大分県立上野丘高等学校卒業
昭和四十四年九州大学文学部卒。昭和五十年に福岡県に教師として採用。平成六年福岡県立西福岡高等学校教頭、平成十一年福岡県立城南高等学校校長、平成十四年福岡県教育庁理事、平成十六年同生活労働部理事（兼）次長、平成十七年福岡県立福岡中央高等学校校長を経て、平成十八年四月から福岡県副知事。

計算通りにいかないのが人生 幅広く大いに学んでほしい

まず本を読む

図書館に閉じこめられかける

まず、九州大学を、そして文学部を志望された辺りから、お話しただけですか。

海老井 私の家は保守的でしたから、兄と違って親から勉強せよとが大学に行きなさいとか言われたことは殆どなく、将来についても漠然とした思いのまま高校に入学しました。ところが受験勉強一色の学校で、九大受験も合格者数かさ上げのために受験したようなものでしたが、合格すると再度別の



大学を受験する気力がなくなっただけで、そのまま入学しました。当時の女子の進路は、数学ができれば薬学部へ、それ以外は文学部といった振り分けで、私は文学部に。詩や小説が好きでしたので特に異議は感じませんでした。何となく自分自身で釈然としませんでした。で、志望の動機はと聞かれると今の立場もありますが、ちょっと残念、つらいところです。

当時女子学生が多かったのは、確かに薬学部と文学部でしたね。大学ではどんな四年間を過ごされたのでしょうか。

海老井 大学は自分で勉強するところだと思っていました。一年半の教養部時代があったし、教養という言葉が生きていた時代で、教養全書とか推薦書があり、まず本を読みました。図書館といえば本学の図書館（箱崎にある、現在工学部食堂が入っている建物：上の

写真）は閉架式で、本は司書の方に持ってきて貰うのですが、私はよく自分で書庫に入って探していました。高い本棚がずらりと並んで臭くひんやりとした石床の書庫にいて、過去から未来へと続く人類の永遠の知性のようなものを感じたりしていたのですが、ある時「ボタン」という重い音がして、慌てて入り口まで走ったことがあります。危うく閉じこめられるところでした。夜だったし、もし間に合わなかったらと考えると、今でもぞつとします。

ご卒業が昭和四十四年三月。

米軍機のファントムが建設中の大型計算機センターに墜落したのが昭和四十三年六月二日です。

海老井 あの頃は七十年安保改訂とベトナム戦争の時代、入学した時から学内には反戦ビラが張られ集会やミニデモがいつもあつて政治色が濃かったですね。そして米軍機墜落をきっかけに大学全体が騒然となつて、講義はよく中断されて討論集会に変わり、バリケードが築かれ、段々エスカレートし

ていきました。そんな状況でしたから学生は否応なく現実の政治や社会の矛盾と向き合い、どうあるべきか、どう対するべきか、その関わり方や姿勢を問われました。私も確かに熱気に吞まれましたが、次第になんだか議論が上滑りしているような頼りなさを感じるようになって、まずはしっかり勉強しなくてはと思うようになりました。

「全く向いてない」教師
現場で目覚める

就職に就かれたのはどのようなことからでしょう。

海老井 自分では教師には全く向いてないと思っていて、卒業時には出版社に内定していたのですが、入社直前になって個人的事情から断念しました。それで九大工学部電子工学科の栗原研究室に研究補佐として入りました。人間以上の人工知能と同時に感情も持つロボットを研究開発するということが、補佐の仕事をししながら本当に技術的に可能なのか、もし成



功したとしてそれはヒューマニズムに反するのではないかなどと、議論好きな教授によく反論していましたが、あれから四十年、人間ロボットとして着実に現実化してきていて、教授にもう一度お会いしたいですね。研究室は夫の転勤によつて二年で辞め、小倉に移つて暫く育児に専念して、やはりきちんと自立しなくてはと就職活動を始めました。でも二十五歳過ぎ、結婚、子どももいる女性の就職など民間ではまず門前払い。女性差別にもろに直面したわけですが、そんな時たまたま先輩の産休代替

教員として教壇に立ちました。二十七歳、落ち着いた進学校の八幡高校でした。

教育者として歩み始められて、いかがでしたか。

海老井 とにかく生徒の反応がすぐに返ってくるのが面白かったですね。授業中わざと異論がでるような言い方をすると、ムキになつて向かってきます。でもこつそり詩を書いて見せにきたり、恋や進路の悩みを打ち明けたり、それがいじらしく可愛くて、翌年、正式に教諭になりました。これまで在職高校は六校ですが、中には教科指導より生徒指導に手を焼く学校もありました。様々な問題を抱えて反抗したり投げやりになったりしている子どもたちに苦勞しましたが、教育の責任と重要性を痛感させられたのは寧ろそんな学校でした。

向いていないと思つていた教職に就いて、どのような先生を目指していらつしやいましたか。

海老井 まず「教師は授業で勝負」ということでしょうか。高校時代

にとてもいい先生に教わりました。教科書解説のワンパターン授業ではなく、内容に関連させてその背景やエピソードなどでいろいろと味付け膨らませてくれて、社会や人間や歴史への興味をひきたててくれる。自我覚醒の時期には、実に面白かった、あんな授業をした、「教科書を」教えるのではない、「教科書で」教える先生になりたいと。ようやく少なくなったかと思えるようになったのは四十歳過ぎ、それからは授業が楽しくなりましたね。

一方で問題を抱えた子どももいます。でも、生まれてまだ十五年、六年、悪そうに見えても、素直で純粋な所をいっぱい持っています。怒り方は厳しい方だったと思いますが、「何でそんなに怒るの?」と言いつつ、怒られると反つて安心するようなどころもあつて、最初は拒否し無視していた子どもがじわじわと近づいてくるようになりました。人として投げやりになつたり、自分を貶めることだけはさせたくなかつたですね。

高校から大学へ人を育てる

平成十一年から平成十四年までの三年間校長を務められた城南高校は、ドリカム^{*}プランで有名です。高校入学時に「十年後の自分」という題で作文を書かせて、学校の勉強以外の様々な機会を捉えて、進学や就職の進路を自ら調べ考えさせる。丁度、海老井校長時代に



聞き手 武谷 峻一教授 プロフィール
昭和四十三年九州大学工学部卒。昭和四十八年同大学院博士課程修了。九州大学助手、講師、助教授を経て、平成十一年から新設のアドミッションセンター教授。

ドリカムが実った感がありましたね。なにより、現役の大学合格率が上がったというので注目されました。

海老井 ドリカムプランは、私が校長としていく六年位前から取り組まれていましたが、私自身教師になるまでに回り道をして、「高校時代からしつかり進路を考えていたら」と思うこともありましたが、ドリカムプランは本当に大事な進路学習指導だと思いました。生徒の殆どが大学進学しますので、プランを積極的におすすめて、同じ勉強するなら将来への設計図を描きながら夢や目的をもって勉強してほしいと思っていました。

ただ通常の授業も課外も部活動も他校と競い合いながら実施して、それに加えてのドリカム活動ですから、先生も生徒も忙しくて大変でしたが、熱意と努力、そしてそれに応えて期待以上に伸びていく生徒たちに、先生たちは教師としての満足感を覚えていたと思います。

そういう大変なことをして生徒を送り出す高校から、大学はこうあってほしいと注文はありませんか。
海老井 最近では開かれた大学志向、高大連携が進み、大学の情報も十分得られるようになりましたが、少し前までは、情報といえ

入試に関しての一般的な説明や案内が殆どでした。ですから実際の大学選別に必要な信頼できる情報、例えば大学の方針や特色、教育や研究の内容、就職状況といった具体的情報が少なかったですね。ドリカムプランに取り組みますと、さらにその必要性を感じました。情報が少ないとどうしても偏差値が幅をきかせることになり、大学選びの実際や公平性の面から見てもやはり問題が多いと思います。そんな中でAO入試が国公立大で実施されるようになりました。中には入学定員の早期確保が狙いのようなものもありましたが、九大のAOは素晴らしいと感激しま

した。

海老井校長最後の年、二十一世紀プログラム一期生二十人の中に城南高校から三人が入り、最大の「学閥」を形成していました。海老井 合格した生徒を通して、今現在の学力だけでなく、将来の可能性や人間性など本当に丁寧に総合的に評価してくださったんだなと思いました。

高校の校長先生からの転身が話題になって一年半が経った今、副知事としてこれからのようなことをしようと考えていらっしゃいますか。

海老井 やはり教育畑出身ですから、教育の問題に力をいれて取り



* 城南高校ドリカムプラン

平成六年より実施。高校三年間の自主的体験的総合的進路学習計画。
十の進路希望に分かれて自主的グループ学習。
(教育・医療・福祉・建築・環境等)
大学・学問研究：情報収集、大学・学部・学科調査、シラバス調査・キャンパス、研究室訪問・大学の出前講座・先端科学技術学問研究
表現力育成：小論文日誌・小論文コンクール・短歌コンクール・
ディベート大会
研修旅行：修学旅行時に各自目的別研修（企業訪問・大学訪問・施設訪問等）
課題研究：一年間の自由課題研究と発表
独自活動：進路学習の一環として個人でとりくむ



かつての教え子丸尾さん（左）が加わって話は高校長時代に

組みたいと思います。またワーク・ライフ・バランスの実現を鍵としながらの男女共同参画の推進、障害者福祉や高齢者福祉、文化・芸術の振興などか私の所管ですの
で、しっかり勉強しながら担当分野の問題に取り組んでいきたいと思っ
てます。

元高校校長、現副知事として九州大学に要望はありませんか。
海老井 九大は今、地元産学官の強力な連携協力のもと、九州大学
学術研究都市構想の実現に取り組
み、九州、アジア地域における「
知の拠点」づくりをめざして大
変積極的に活発に動いておられま
す。水素エネルギー、ナノテクノ
ロジー、バイオテクノロジー、シ
ステムLSIなど先端科学研究、
その他多くの戦略的研究プロジェ
クトを中核となつて推進されてお
り、構想の実現成功の多くが九大
の肩にかかっているのだと思いま
す。七帝大の伝統を持つ総合大学
福岡というアジアに近い地域に位
置している地理的条件、これらは
九大が発展していく大きな強味だ

ろうと思います。キャンパスの完
全移転までまだ相当の時間がかか
りそうですので、とても不自由だ
ろうと深く同情していますが、ぜ
ひ頑張っていたら、九州、アジ
アのみならず世界で活躍する多く
の人を育てていただきたいと願っ
ています。

最後に、先輩として、後輩た
ちへアドバイスをお願いします。
海老井 九大生は本人が考えてい
る以上に、周囲の人たちは九大生
を将来のリーダーとなつて社会で
活躍する人だと期待して見ていま
す。そのことを意識して、銜わず
に気概をもってリーダーになつて
ほしいと思います。もう一つ、今
は若い人たちが「無駄」をしなく
なつたように感じます。受験勉強
の影響なのかもしれませんが、最
小限の労力で最大限の実を得よう
とする効率志向を強く感じます。
若いときの必要と思われない勉強
の方が本当の創造性を育ててくれ
るように思います。何事も計算ど
おりにはいかないのが人生、何がど
こで身を助けるかわかりません。

社会的な責任を問われず自由に勉
強できる貴重な時代、幅広く勉強
してほしいと、少々の反省をこめ
てのアドバイスをいたします。

* * *

インタビューの終わり近くにな
つて、海老井校長時代最後の城南
高校卒業生で九州大学二十一世紀
プログラム一期生、現在東京大学
公共政策大学院で行政学を学んで
いる丸尾圭祐さんが駆けつけまし
た。丸尾さんは、ドリカムブラン
の一環で参加した「第一回大学サ
ミット（平成十二年五月開催）」
で、当時の杉岡総長から創設間近
だった二十一世紀プログラムにつ
いて聞き、法学部志望を変更して
挑戦し、入学しました。

「ドリカムの趣旨どおり、自分
で進路をみつけてきたのね」「あ
なたはドリカムと二十一世紀プロ
グラムの良さの象徴ですね」海老
井副知事は、久しぶりに会った
「教え子」の成長した姿に、先生
のまなざしに戻っていました。

「効率志向」の勉強ではなく、
「無駄」と思えることこそ
本当の創造性を育ててくれるのだと思います。



九大人が伝える
進化文化する
文化子
シリーズ九大人
インタビュー

FRONT
RUNNER

シリーズ研究

ふろんと
ランナー

「ふろんとランナー」は、九州大学の研究の最前線をインタビューで紹介するシリーズです。シリーズ第五回目は、比較社会文化研究院の高橋憲一教授に、システム情報科学研究院の安元清俊教授が聞きます。

科学史

比較社会文化研究院 教授

高橋 憲一

たかはし けんいち



聞き手 システム情報科学研究院 安元清俊 教授

VOL
5

ガリレオの
運動論形成過程について
新説を提出した
『ガリレオの迷宮』で、
第六十回毎日出版文化賞を受賞。

ガリレオも

自身の迷宮を彷徨い続けた

安元 第六十回毎日出版文化賞受賞おめでとございます。「ガリレオの迷宮」という本の題名から、とっさに宗教裁判を想像したのですが、そうではなく科学史の専門書なので、すね。

高橋 裁判について書いてあるのではないかと先生にある意味で誤解していたいたしたのは、本のネーミングが非常に良かったと思うのですが

(笑)、ガリレオの宗教裁判について書き出すと科学と宗教という大きな問題にまで踏み込まねばならず、この本ではもっと限定してガリレオが運動についてどういふふうな理論を作り上げていったのかということを書いていきます。

安元 副題にガリレオの言葉が引用されています。

高橋 ガリレオは「自然は数学の言語で書かれている」と言いました。彼にとって一番重要なのは自然の理解でした。その自然は数学という言



語を使わないと理解できないという趣旨の有名な言葉です。私が「書かれていますか？」とあえて疑問形にしたのは自然を数学的に読み解くといっても、これはガリレオが初めて試みることで、研究はあっちへ行ったりこっちへ行ったり、間違った道を選ぶこともあってまさに迷路を彷徨っているのです。それとも一つは近代科学自身も巨大な迷宮と化しているのではないかという思いが私には強くあって、近代科学の創始者の一人がガリレオですから、彼が作り出した迷宮には二つあるという意味を本のタイトルには込めています。

高橋 物体が単位時間にどれだけ落下してくるかという、1、3、5ときれいな奇数になり、落下速度は時間に比例する。ということは今でなら自明のことです。しかし、ガリレオは自然学と数学という二つの学問を初めて結び付けようとする人ですから、「自然は数学の言語で書かれている」と思っているもなかなかそれを押し通すのは難しいのです。奇数の比でだんだん増えてくるっていうのは確かに見つけたけれども、原理を数学的に読み解かなくては行けないという段階で非常に苦労するわけです。通常の理解ではガリレオは運動論の本格的な研究を十年間ぐらいいして、一六〇年には決着をつけ、次に望遠鏡を作って天体運動に

揚々と乗り出したという風に語られますが、私がガリレオのマニユスクリプトを読んでみると、どうもそうは理解できない。一六一〇年どころか一六一八年ごろに弟子に清書させたノートでもやっぱり基本的原理が見つかっていないし、それどころか落下速度は距離に比例するという間違った原理をまだ使っているのです。ガリレオが間違った原理を手に入れるのは一六〇四年ですが、これが迷宮の入り口です。そんなお先真っ暗という一六〇九年に、たまたま望遠鏡ができたらしいという噂が耳に入ってくるのです。自分で作ってみて精度を上げていったら、木星の衛星であるガリレオ衛星を発見するなど、そっちの方に活路を見いだしているけれど、一方、運動の数学的理論は迷宮に入ったまま、にっちもさっちもいかず、忸怩たる思いです。「自分は一つ二つ発見をしたけれども、自然全体あるいは自然全体と言わないまでも運動論全体が数学的に展開できるというのは本当だろうか？」とガリレオは彷徨い続けているのです。

ドレイクの亡霊を追い払う

安元 ガリレオの膨大な手稿の中に

書かれた数学的内容を理解したり検証したり、また相互を関連付けるなどは非常に大変な仕事ではないかと、門外漢の私でも想像できるのですが、研究をまとめるにあたって、先生がいちばん腐心された点は？

高橋 ガリレオ研究については実は二十世紀初頭までに立派なガリレオ全集全二十巻ができていまして、研究者はそれを使っていました。ところがそのよくできた全集の中にも取り込まれていないガリレオの手稿があるのです。大したものではないだろうと思われていたのです。ところが、ガリレオの専門家としてこの人の右に出る人はいないだろうといわれるスティルマン・ドレイクという人が一九七〇年代から省かれた手稿の研究を始めていろんな発見をしました。ガリレオのノートから理解するのですが、ノートは人に見せることを前提としていませんから日付もページも一切ありませんし、ナポレオンがイタリヤからフランスへ戦利品として持って行ったり、いろいろな手を経ているのでバラバラの状態。そのバラバラの史料からガリレオはこんなふうに運動理論を作り上げた歴史的に理解するのは非常に困難な作業なのですが、それ



聞き手：安元清俊教授

にこの三十年間ほど、特に運動論を研究する人たちは挑んできました。ドレイクとその次に私が大いに裨益されたのにウィニフレッド・ワイザンという人がいます。二人の論文はほとんど読み込んでいたのですが、だんだんと「なんかちょっとおかしいぞ」と思いました。例えばドレイクの場合であればノート解読に自分の先入観をストリートに入れているのが気になり始めたのです。そこでマイクロフィルムでガリレオのノート類を取り寄せて、この史料から言えることだけはきちんと言おう、それ以外のことは言うまいと自分なりのスタンスを決めたのです。そうすると言えることは何なのかというと、例えば数値の下に引いてある線。たぶんガリレオが数値計算をした時に、「こ

れは初期値だよ」ということでアンダーラインをしているんじゃないかとアタリをつける。私ももとは理系にいた人間ですし、実験などはある目論見を持ってやり、初期値に線を引くというのは感覚としても理解できるのです。そんなどうでもよさそうなところを手がかりに精査していくと、ドレイクの解釈がかなり崩れてくる。ガリレオが理論を作った順序は歴史的に再構成できるじゃないかって見込みが出てきて、それでのめり込んでいったのです。

安元 いわゆる孫引きなどではダメということですか。やはり本物をきちつと見るとということですね。

高橋 本のあとがきにも書いているのですが、十年ほど前、ベルリンのマックス・プランク科学史研究所でガリレオの運動論について発表する機会がありました。その発表に対して、「ドレイクの亡霊を追い払うのは難しい」と評されたことがあります。私としては、ドレイクとは違ったガリレオ運動論の歴史的再構成を發表したつもりでしたから、大いに議論になりました。前述のアンダーラインが出てくるだけではなくラテン語とイタリア語が混交している「手稿一五二r」や実験データと理

論値を記した「手稿一五六v」の解釈になると全くの平行線になったのですが、私なりの路線を独力で推し進めた結果が本書であり、ドレイクの亡霊から自由になつてると自負しています。

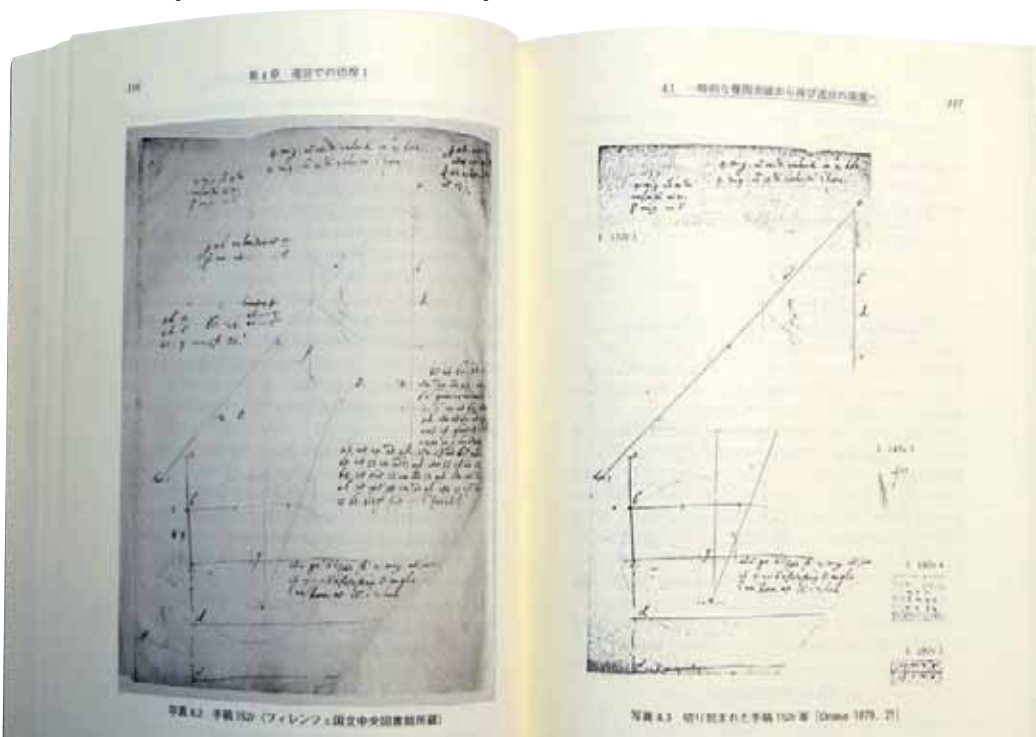
安元 先生の「手稿一五二r」の解釈も面白いですね。

高橋 意味もなく書き分けているのではなく、最初はラテン語で書いていたけれども、考えに詰まってふとした思い付きを思わず母語のイタリア語で書いたのではないかと、考えています。

安元 なるほど。ラテン語にイタリア語と研究には言語の壁も立ちほだかつたのでしようね。

高橋 先ほど少し言いましたが、大学の時は恥ずかしながら理系で電気工学が専門。途中で技術者になるまいと思つて科学史に転じ、ヨーロッパの科学史の古いところをやるうと思つたものですからラテン語は当然できません。まあ苦労しましたね。ラテン語の文法書を自力で読み、イタリア語の文法書も同時に読み進め

ながら、ガリレオのテキストを読むという苦労もしました。私の恩師の伊東俊太郎先生は語学の天才で、ギリシア語からアラビア語、さらにエジプトのヒエログリフ（象形文字）の文法までお付き合いしましたが、そこでギブ・アップ。でも、ラテン語はイタリア人が有利なのですが、彼らがさつと読み流すところをこつ



手稿152r（左頁）とドレイクによるその探録（右頁）



高橋 恵一教授

ちは読めないもんですから、いちいち引っかけたってそれゆえに読み込めるメリットも意外に大きく、ラテン語を自分の専門の言語にしたことは非常にラッキーだと思っています。

自分の「問い」を育て続けよう

安元 最初は十三世紀のロジャー・ロツパの科学史に入り、ユークリッド「反射光学」のラテン語写本群を世界で初めて解読し、テキスト編纂されています。中世を対象にしている、近代科学の創設者の一人であるガリレオに移ったというのはそれだけガリレオが魅力的だったということですか。

高橋 そもそも私が電気工学から科学史に転じたのは、ちょうど学生時代と重なった一九六〇年代後半の大学闘争に端を発します。その時、「近代とは何か」「近代科学とは何か」ということが熾烈に問われていて、また、その問いは私にとっても非常に重要であつたために巻き込まれていったのです。もちろん、自分が独自の論点を出せるとはとても思えませんでした。そこで、近代が否定した中世をまずやることで近代が逆照射できるのではないかと考えたのです。ガリレオも少しずつはやっていて、ドレイクやワイザンとはちよつと違った方向で論文も書いたのですが、この時点ではのめり込むつもりは全くありませんでした。しかし、ガリレオの運動論形成過程の学説はこういう方向で進展していくだろうと私が思っていた方向での論文を誰も書いてくれないのです。これはひよつとして私が書いてもいいのかな、と。それが始まりです。けれどもいかんせん歩みはのろく、二十年、三十年かかってしまったというわけです。

安元 まさに労作ですね。先生の姿勢もまたこれからの人たちに影響を与えていくと思うのですが、最後にメッセージをいただけますか。

高橋 自分なりの問いを持つことがいちばん重要だと思います。私が電気工学をやめて科学史をやろうと決意したのも、科学とは何か、近代科

学とは何なのかという問いに、何とかして自分なりに答えたいと思ったからです。当時いろいろな人がいろいろな答えを発信していて、それはそうだと思いつつも、自分なりに人の答えをチェックし、自分の問いを見据えてきたつもりです。注意したのは、自分の問いに対して人が答えを出したという時にめげないこと。そして、その答えにすぐ飛びつかないこと。さらに、自分オリジナルの問いをせっかく見つけても誰かが答えているのじゃないかと思つてそれを一生懸命調べた拳句、問いが消えてしまうという人も圧倒的に多いのです。問いは育てていかなければ。

安元 迷宮はその問いを育てるインキュベーターのようなもの。私たちも自分自身の迷宮を持つということですね。

高橋 恵一教授 自己プロフィール

一九七〇年、とりあえず、早稲田大学理工学部電気工学科卒業。一九七四年に東京大学大学院理学系研究科(科学史・科学基礎論専攻)の博士前期課程に入学し、同後期課程を一九七九年に単位取得退学。一九八三年に九州大学教養部に助教として着任し、一九九二年に同教授。同年、ユークリッドの『反射光学』のラテン語テキスト編纂で理学博士(東京大学、科学史では日本最初の学位取得だと思つ)。本学の大学院改組に伴い、二〇〇〇年より比較社会文化研究院教授に配置換え、現在に至る。専攻は科学史。一七〇〇年以前のギリシャ・アラビア・ヨーロッパの精密科学の歴史と科学論に関心を寄せる。



高橋 恵一教授(左)と、聞き手の安元清俊教授

研究

—最近の話題から

九州大学は、将来構想の柱として、「アジア指向」とともに「新科学領域への展開」を掲げています。九州大学の研究に關する最近の話題から、いくつかご紹介します。

〔注〕 科学技術振興調整費について

科学技術振興調整費は、総合科学技術会議の方針に沿って文部科学省が運用を行う、政策誘導型の競争的資金です。

具体的には、科学技術の振興に必要な重要事項の総合推進調整を行うための経費であり、各府省の施策の先鞭となるもの、各府省毎の施策では対応できていない境界的なもの、複数機関の協力により相乗効果が期待されるもの、機動的に取り組むべきもの等で政府誘導効果が高いものに活用されています。

科学技術振興調整費の目的とする施策

1 優れた成果の創出・活用のための
科学技術システム改革

2 将来性が見込まれる
分野・領域への戦略的対応等

3 科学技術活動の国際化の推進

先端融合医療 レドックスナビ 研究拠点 始動！

薬学研究院・
機能分子解析学分野

教授 内海 英雄

(うつみ ひでお)

1 生体レドックスとは

レドックス (redox) とは、還元 (reduction) と酸化 (oxidation) を示す言葉であり、化学では酸化還元の意味で広く用いられています。

一方、私たちの体の中で起こっている「生体レドックス」は、このレドックスよりも広い概念を含んでいます。私たちの体の中では、ミトコンドリアの電子伝達系でレドックス反応によってATPが作り出されています。この電子伝達系の酵素から

漏れ出した電子によって酸素が還元されることで活性酸素が作られます。

このように、ミトコンドリア電子伝達系のような酸化還元酵素系から活性酸素が作られ、微量の活性酸素は生体の恒常性の維持に寄与しています。また、ビタミンCなどの、活性酸素を消去する抗酸化物質が私たちの体の中に存在し、活性酸素が作られても消去することで恒常性を維持しています。しかし、活性酸素が異

常に作られて体内の抗酸化物質によって消去しきれなくなると、恒常性が破綻して、生活習慣病やがんなどさまざまな病気の発症を引き起こします。これらを総括した概念が「生体レドックス」です。したがって、

「生体レドックス」をいかにして視るのか、自在に操るのか、そして治療するのか、これらを統合した研究拠点を形成することは大変意義があると考えています。

先端融合医療レドックスナビ
研究拠点について

九州大学は、文部科学省の科学技術振興調整費「先端融合領域イノベーション」創出拠点の形成」に採択され、平成十九年七月より「先端融合医療レドックスナビ研究拠点」プロジェクトを開始しました。本学の薬学、医学、工学、農学の叡智と分析機器、医用機器、製薬工業界の創造力を結集し、生体レドックスを視て操り治療する統合技術概念であるレドックスナビゲーションのもとに、レドックスの関連する疾患の画像・解析技術、診断、創薬・治療の確立を指向した先端融合医療領域を創出します(図1)。

具体的には、五つのグループ(生体レドックス画像解析、メタボリック・プロファイリング、生体レドックス内視鏡、レドックス疾患創薬、先端がん診断・創薬)を設置し、レドックスをキーワードとして薬学が医と工・農の橋渡しを行い、全領域を統合します。

レドックスナビゲーション

「生体レドックスを、見る・操る・治療する」

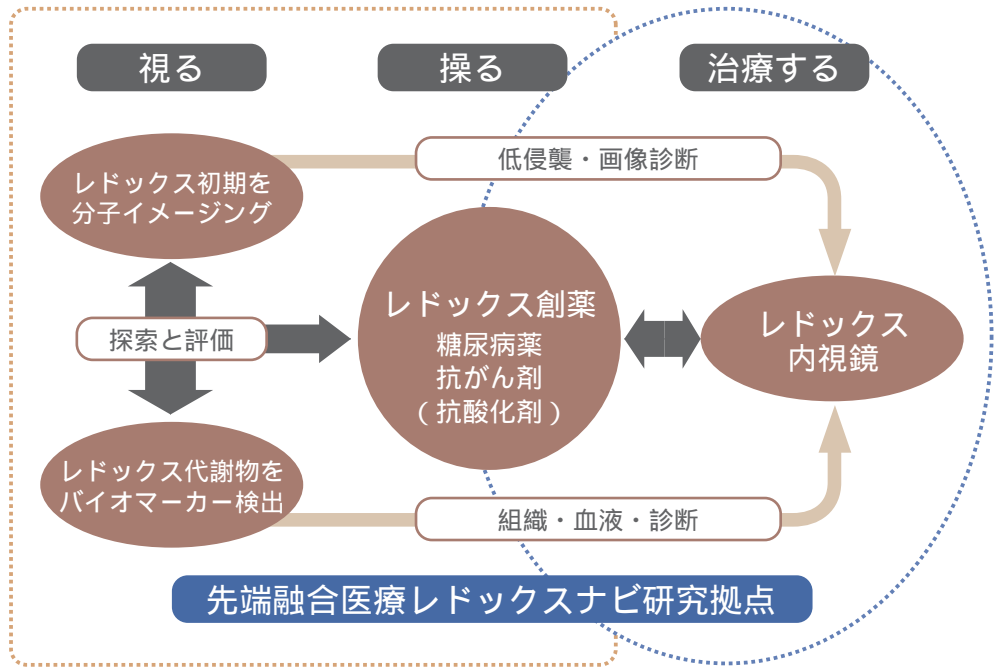


図1 先端融合医療レドックスナビ研究拠点の概念図

平成二〇年二月には本学病院旧東病棟五階に約一〇〇〇㎡の研究拠点スペースが整備される予定で、その完成に向けて着々と準備が進められています。本プロジェクト専用のホームページも開設し(<http://www.ledoxnavi.com/>)、平成十九年八月十日(金)には九州大学医学部百年講堂にて開所式が行われ、一〇〇名近くの皆様にご参加いただきました(写真)。

平成十九年九月、英国 Oxford Instruments 社より 13C NMR の感度を一万倍にまで増強する特殊な装置を日本で初めて導入し、体内代謝の高感度計測など各種応用に向けて、現在研究を進めています。また旧東病棟五階の研究拠点スペースが完成次第、MRI 装置や MASS 装置、OMRI 装置など各種生体レドックス解析装置を導入し、先端融合医療領域のイノベーション創出に向けて、本格的に稼働する予定です。



先端融合医療レドックスナビ研究拠点開所式

次世代研究スーパーリーダー養成プログラム（SSP）

1 SSPによる改革の進展と 総長裁量経費による プログラム拡大

次世代研究スーパーリーダー養成プログラム（SSP）は、科学技術振興調整費^{13頁の注}、若手研究者の自立的な研究環境整備促進^{13頁の注}事業として平成十八年度に採択された取組であり、国内外から優秀な若手研究者を多数迎え、プログラムが進行中です。

本プログラムの目的は、*テニユア・トラック制を前提とした「若手研究者の育成」「新研究分野の開拓」「研究組織の改革」の三つを実現することです。平成十八年度は、これらを盛り込んだ研究プロジェクトを学内各部署から募集して六件を採択し、プログラムを実施しました。（図2）その結果、改革に極めて有効であるとの総長の判断により、総長裁量経費を充当して、平成十九年度から新たに三件の研究プロジェクトを開始しました。今後さらなるプロジェクトの拡大を予定しています。（図3）

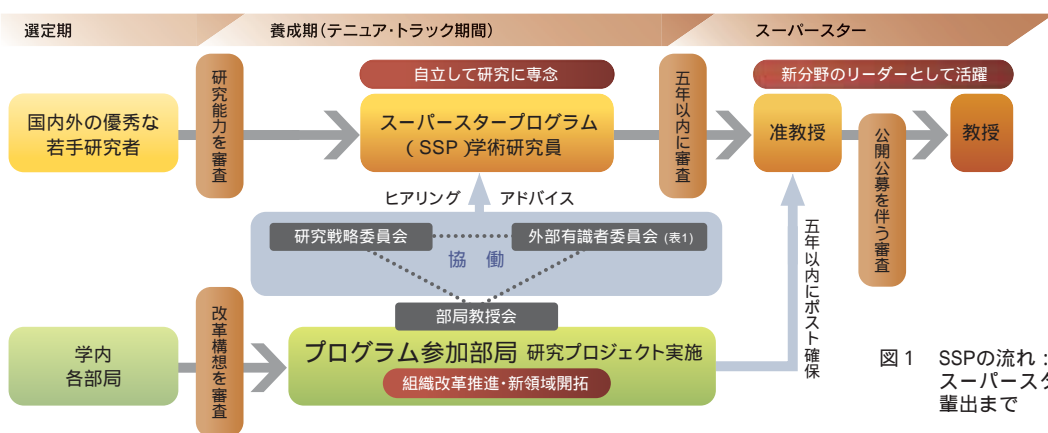


図1 SSPの流れ：スーパーリーダーの輩出まで

2 次世代を担う 研究スーパーリーダーの 養成に向けて

現在、二十四名の若手研究者がスーパーリーダープログラム（SSP）学術研究員（特任准教授）として九つの研究プロジェクトに参加しています。SSP学術研究員は、研究環境面、給与面等での支援や学外の有識者からのアドバイスを受け、自立して独創的な研究に取り組んで実績を積みみます。五年間の養成期間終了までに、業績審査を経て本学の准教授として採用される見込みです。将来、研究スーパーリーダーとして世界レベルでの活躍が期待されます。

本号と次号で、九つの研究プロジェクトとSSP学術研究員のみなさんをご紹介します。

図2

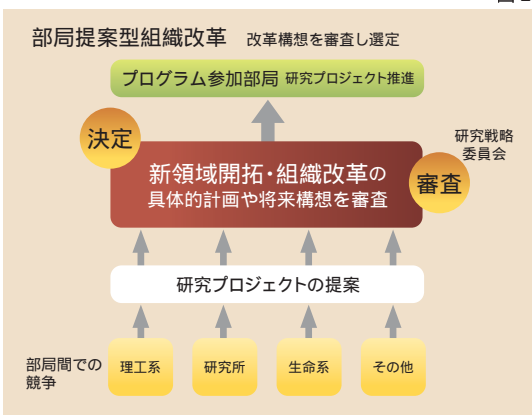
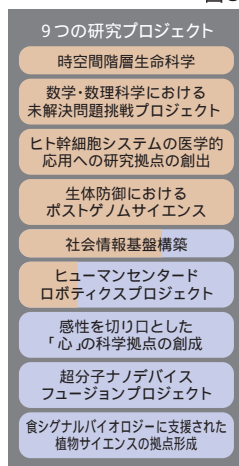


図3



*テニユア・トラック制
若手研究者が厳正な審査を経て安定的な職を得る前に、任期付の職で自立して研究経験を積めるしくみ

科学技術振興調整費による
総長裁量経費による

表1 外部有識者委員

倉地 幸徳 (産業技術総合研究所 センター長)	佐伯 胖 (青山学院大学 教授)
伊ヶ崎 文和 (産業技術総合研究所 センター次長)	篠原 和毅 (食品総合研究所 客員研究員)
入江 正浩 (立教大学 教授)	高橋 陽一郎 (京都大学 研究所長)
大家 寛 (福井工業大学 教授)	松永 勝也 (九州産業大学 教授)
具嶋 弘 (医薬基盤研究所 監事)	宮野 悟 (東京大学 教授)
國武 豊喜 (北九州市立大学 副学長)	持田 勲 (科学技術振興機構 福岡プラザ館長)
駒井 謙治郎 (福井工業高等専門学校 校長)	

SSPウェブサイト http://www.srp.kyushu-u.ac.jp/ssp_home/index.html

SSP研究プロジェクトの紹介



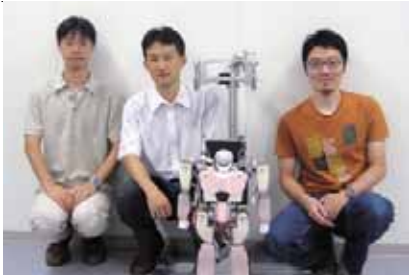
(左から)岡田誠司、稲田明理、大川恭行、杉山大介

ヒト幹細胞システムの医学的応用への
研究拠点の創出(医学研究院)

SSP学術研究員

岡田誠司、杉山大介、大川恭行、稲田明理

幹細胞研究は、「再生医学」において主要な位置を占め、人体への応用を最終目標として世界中で精力的に押し進められています。本プロジェクトはヒト幹細胞研究グループの、造血系、神経系、筋骨格系、消化器系の四つの分野において、幹細胞の分化・再生を中心とした研究を進めています。造血系では主に造血幹細胞の発生由来を、神経系では外傷後の修復過程における幹細胞の役割を、骨格筋では筋幹細胞の分化制御メカニズム解明を、消化器系では糖尿病の再生治療を目指し幹細胞からの膵細胞の誘導についての研究を行っています。再生医療技術開発のためにはマウスで得られた知見をヒト幹細胞システムにおいて詳細に検討し修正を施すことが必要であるため、研究組織内にヒューマナイズドマウスコアを設け、それぞれの分野で得られた知見を再生医療へ応用する際の検証を迅速に行い、最終的に統合されたヒト幹細胞学の創出を目指しています。



(左から)杉原知道、小川原光一、田原健二

ヒューマンセンタードロボティクスプロジェクト(工学研究院、システム情報科学研究院)

SSP学術研究員

小川原光一、杉原知道、田原健二

少子高齢社会への対応や、安心かつ豊かな社会基盤整備のため、人にサービスするロボットや社会インフラとしてのロボットの期待が高まっています。そこで、本プロジェクトではロボティクスセンサ、ヒューマノイドロボット、人間支援ロボティクスなどロボティクス新分野の若手研究者三名により、人間とロボットの共生社会実現のための研究「ヒューマンセンタードロボティクス研究を推進しています。ここでは特に、人とロボットが触れ合う状況を想定した人間型ロボットの安全な動作制御、人とロボットの状態を知り、ロボットの安全性と実用性を向上させるロボット用視覚センサ、人と親和性が高く、人と触れ合いながら作業が実現できるロボットハンドを中心に研究をおこないます。

また、これらの研究成果を統合し、安全な福祉ロボットや実用的なサービスロボットの開発にも積極的に取り組むことで、人とロボットの新たな関係を築くロボティクス新分野開拓に挑戦していきます。

社会情報基盤構築(システム情報科学研究院)

SSP学術研究員

稲永俊介、Ahmed Ashir、田頭茂明

情報通信技術は、人々が安全で安心して生活でき、快適で公正でかつ適度な競争を行える社会を支える各種システム(経済、行政、物流、教育、交通、情報通信、エネルギー供給など)の神経系となっています。我々は、社会システムを支える社会情報基盤を構築する指導原理と技術体系を提案することを目指しています。いろいろな技術分野や社会科学の専門家と連携して、情報通信技術の活用を前提とした総合的な社会情報基盤の設計指針の確立と新しい学問領域の構築を目指しています。具体的には、電子マネーや個人の認証など社会情報基盤の新しい情報科学的モデルの構築
社会情報基盤のための情報システム設計手法の研究

開発途上国の社会情報基盤の構築と実証的な社会実験
特に、については、バンングラディシユのグラミンググループと協定を結んで、農学、医学などの異分野の研究者と協力して総合的な研究体制を構築しています。



(左から)田頭茂明、Ahmed Ashir、稲永俊介

九州大学 東アジア環境問題プロジェクト

九州大学全学文理融合・国際産学官連携プロジェクト

△プロジェクト発足の背景▽

急速な中国・韓国の経済発展は東アジアおよび日本にとって大きな利益をもたらす一方で、様々な環境汚染が急速かつ大規模に進んでいます。この環境汚染はそれぞれの国内で人々の生活を脅かすに留まらず、東アジア全域がその影響を受けることとなります。特に我が国は偏西風・黒潮・対馬暖流の存在により、致命的な被害を受ける恐れがあります。

中国大陸にもっとも近い研究重点大学で、環境研究に優れた研究者を多数擁し、アジア学長会議を主催するなどアジアの大学ネットワーク形成に実績を挙げている九州大学は、二〇一一年に迎える百周年記念事業の一環として『東アジア環境問題』に全学で取り組むことを決めました。

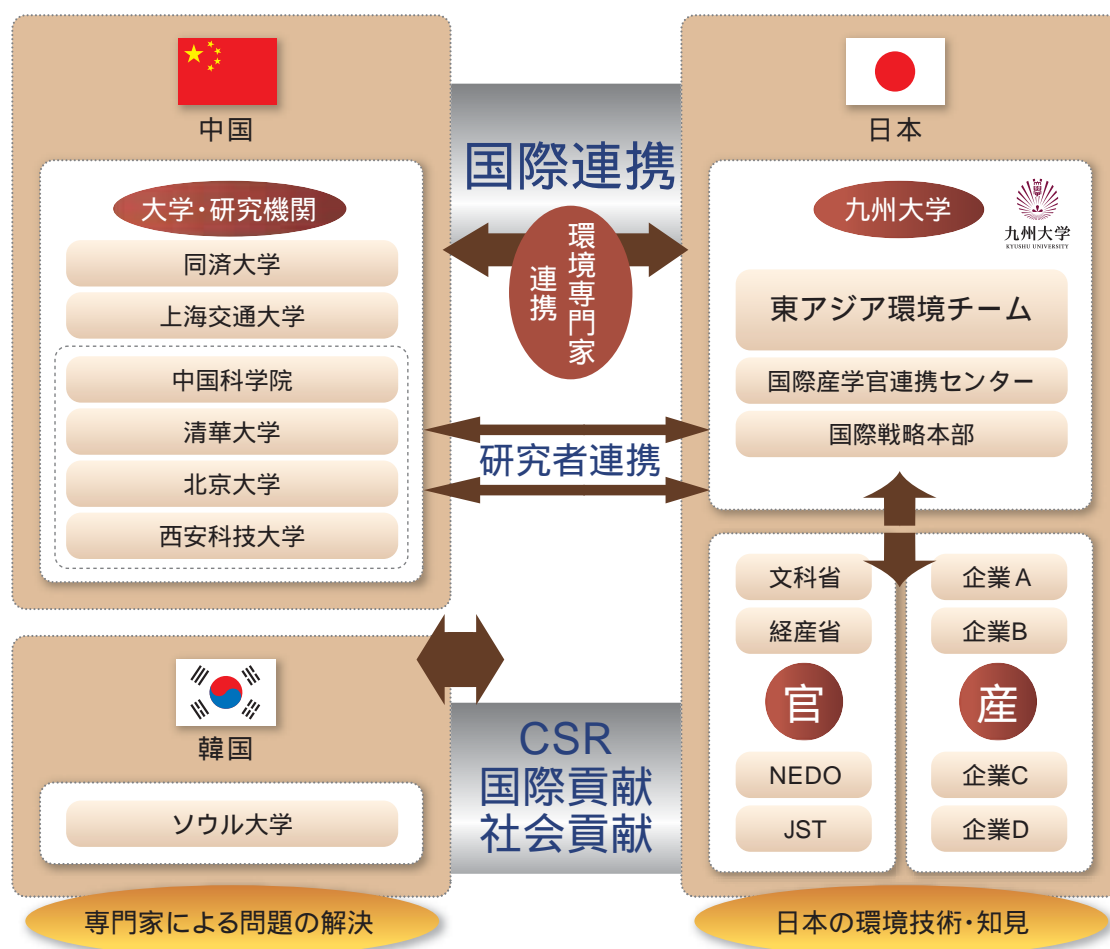
△プロジェクトの概要▽

このプロジェクトでは、九州大学内の研究者を「東アジア環境問題特別チーム」として組織し、テーマごとに複数のグループに編成して、中

中国・韓国の連携研究機関

日本（九州）と東アジア相互の地域のメリット（Win-Win）を目指す

九州大学 国際産学官連携プロジェクト



国や韓国等東アジアの主要大学・研究機関、および日本の企業等と、国際間の産学官連携共同研究を進めます。

＜国際産学官連携先＞

既に、「同済大学」、「上海交通大学」とは本プロジェクトの組織協力に合意しています。また、「清華大学」、「浙江大学」、「西安建築科技大学」、「中国科学院」、韓国の「ソウル大学」とはこれまで環境研究について共同研究の実績があり、今後の研究者間の協力に合意しています。

さらに、TOTO株式会社などからご支援・ご協力を受ける予定であり、今後多くの企業にご協力を呼びかけるとともに、NEDO、JST、JSPSなど公募型資金の獲得を目指しています。

このプロジェクトは、九州大学が東アジアの一員として取り組む九州大学独自の国際産学官連携プロジェクトです。これを推進することで、東アジアひいては全世界の環境問題の解決につながるものと考えます。皆様のご支援とご協力をお願い致します。

東アジア環境問題プロジェクト

テーマごとのグループと担当分野



平成19年11月14日には、各グループと同済大学、上海交通大学の研究者が集まり、キックオフミーティングが開かれた。



お問い合わせ 知的財産本部（国際産学官連携センター）
 本部長 小寺山 亘 | センター長 谷川 徹 | 担当 篠崎 真美
 電話 / 092-642-7356 FAX / 092-642-7128
 E-mail / plan@imaq.kyushu-u.ac.jp

九州電力株式会社と組織的な連携の枠組みでの 環境プロジェクト開始

—— 持続可能な森林環境保全に向けて ——

森林を取り巻く環境の変化

地球温暖化の影響が、様々な形で世界各地において急速に表面化しています。台風の大規模化による降雨量の増大も、温暖化の影響の一つと考えられます。特に、平成十七年の台風十四号では甚大な被害が発生し、二十六名の尊い命が失われました。

九州電力㈱は宮崎県の耳川流域に水力発電所を備えた七基のダムを保有しており、当時、流域森林の斜面崩壊による土砂流入・流木の被害を受けました。また、このような被害はこの台風十四号の例のみならずここ数年拡大傾向にあり、莫大な対策コストがかかっています。

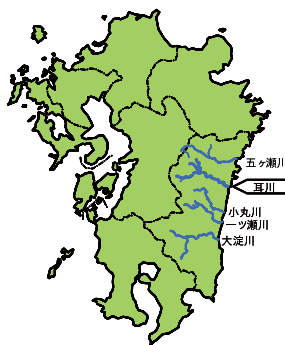
斜面崩壊の大きな原因の一つは異常気象にあることは否定できませんが、森林荒廃の影響も見逃せません。外国産材との競合や少子高齢化等により林業経営環境は悪化の一途を辿っており、その結果十分な整備を実施できずに、森林（人工林）の水源涵養機能は確実に低下していると考えられます。このままでは、洪水等に対する地域住民の不安も尽きません。



塚原ダム下流における斜面崩壊



流木の状況（山須原ダム）

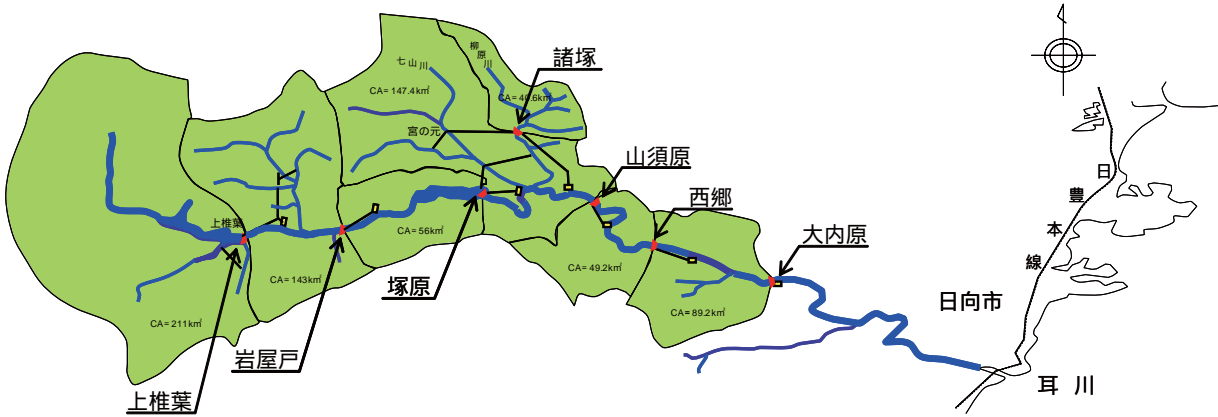


耳川の位置

試される九州大学の総合力

このような森林を取り巻く状況を受けて、九州電力㈱土木部は近藤隆一郎教授（農学研究院森林資源科学部門）へ相談を持ちかけました。近藤教授が内容を吟味すると、このような自然を相手とする問題は総合的かつ長期的な視点で取り組む必要があるため、根本的な解決に当たり九州大学としての総合力が試されると感じられました。そこで、個別ではなく組織的な対応をすべきと考え、知的財産本部へ連携コーディネートをお願いしました。

幸いなことに、九州大学は九州電力㈱と組織対応型連携契約を既に締結（平成十六年十一月）していたため、速やかな対応が可能でした。



耳川地域のダム位置

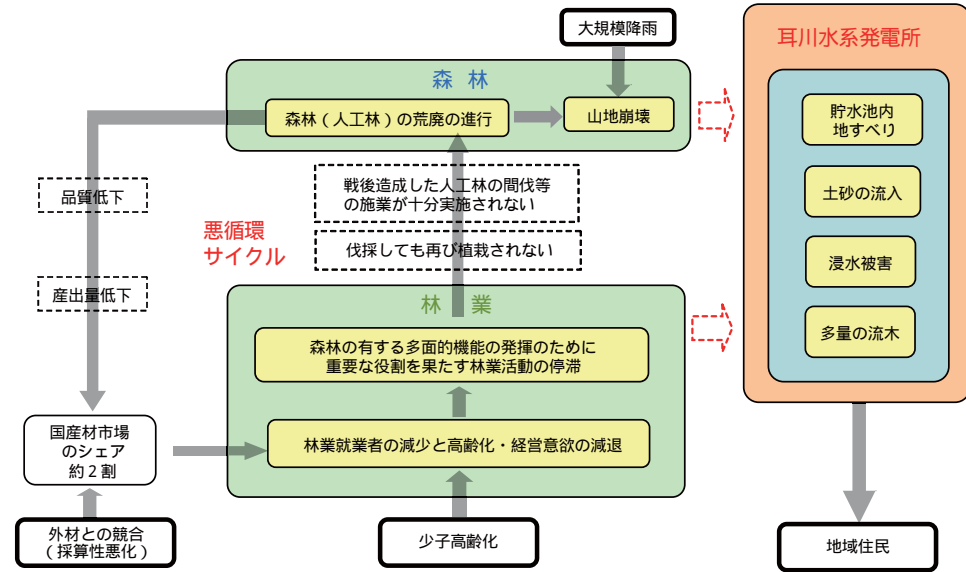
研究開始

本年六月のキックオフ会議より、本格的な共同研究が開始しました。総括テーマ名「耳川地域の森林整備に関する総括的研究」。本プロジェクトは個別共同研究十二テーマ、参加教員十九名（農

学研究院森林資源科学部門及びバイオアーキテクチャーセンター所属）で構成されており、森林管理、土砂・流木調査、バイオマスの有効利用等、幅広く総合的な研究を推進しています。まずは本年度末までに基礎的な調査・研究を行い、方向性を見極める予定です。更に、外部民間企業二社、宮崎県森林組合連合会、及び県・町・村の協力も得て、着実な成果の創出を目指しています。

また、平成十九年六月十九・二十日に、プロジェクトメンバーによる耳川流域の現地視察会を実施し、実際の現場状況の把握を行いました。想像

以上に大規模な斜面崩壊を起こしている現場を目の当たりにし、現地視察会参加者一同、身をもって本研究の社会的意義について実感しました。



森林と林業の悪循環サイクル

期待される様々な波及効果

森林と林業の「悪循環サイクル」を改善し、林業経営の正常化や森林の管理保全を図ることで、災害を起こしにくい森林を目指します。その結果、地域住民の安心・安全の確保につながり、更に同様のモデルを全国他地域へ広めることも考えられます。また、水力発電は二酸化炭素を排出することなく環境にやさしいクリーンな再生可能エネルギーを生み出すため、地球温暖化防止にも貢献できるものと思われれます。

お問い合わせ先等

組織対応型連携の詳細については、知的財産本部HP内、「組織対応型連携について」<http://imaq.kyushu-u.ac.jp/bn/index.html>をご参照ください。

連携担当事務局：
知的財産本部リエゾン部門・伊藤 / 貞嶋
092 642 4364

二〇〇七年一月から同年九月までの間に、九州大学発の七件の研究成果が海外の有名誌に掲載されました

清原 裕

Nature Genetics



掲載 日本人の脳梗塞発症に関わる遺伝子を発見
 福岡県久山町住民の疫学調査で
 氏名 医学研究院 清原裕教授
 掲載 Nature Genetics, Vol.39, pp.212-217 (8 January 2007)
 URL <http://www.nature.com/ng/journal/v39/n2/full/ng1945.html>

和

Nature



掲載 脳内の掃除法「ミクログリア」の働く仕組みを解明
 氏名 薬学研究院 井上和秀教授
 掲載 Nature, Vol.446, pp.1091-1095 (5 April 2007)
 URL <http://www.nature.com/nature/journal/v446/n7139/full/nature05704.html>

佐方 功幸

Nature



掲載 脊椎動物未受精卵の分裂停止の仕組みを解明
 (不妊の新しい診断・治療法開発に足がかり)
 氏名 理学研究院 佐方功幸教授
 掲載 Nature, Vol.446, pp.1100-1104 (5 April 2007)
 URL <http://www.nature.com/nature/journal/v446/n7139/full/nature05688.html>

Science



掲載 水素活性化酵素のモデル化に成功
 ー水素エネルギー研究開発へ応用ー
 氏名 未来化学創造センター 小江誠司教授
 掲載 Science, Vol. 316, no. 5824, pp. 585-587 (27 April 2007)
 URL <http://www.sciencemag.org/cgi/content/full/316/5824/585>

佐田 和己

Nature Materials



掲載 世界初、自重の数百倍の有機溶媒を吸収する材料を開発
 ー非極性有機溶媒の高吸収性樹脂としての親油性高分子電解質ゲルー
 氏名 工学研究院 佐田和己准教授
 掲載 Nature Materials, Vol.6, pp.429-433 (30 April 2007)
 URL <http://www.nature.com/nmat/journal/v6/n6/full/nmat1904.html>

岡

Nature



掲載 重い星が一生の最後に起こした2種類の爆発を初観測
 ー星の一生がよりくわしく明らかにー
 氏名 理学研究院 山岡均助教
 掲載 Nature, Vol. 447, pp. 829 - 832 (14 June 2007)
 URL <http://www.nature.com/nature/journal/v447/n7146/full/nature05825.html>

福

Nature Immunology



掲載 アレルギー反応を制御する新しい分子メカニズムを
 世界で初めて解明
 T helper type 2 differentiation and intracellular trafficking of the interleukin 4 receptor- α subunit controlled by the Rac activator Dock2
 氏名 生体防御医学研究所 福井宣規教授
 掲載 Nature Immunology, Vol.8, pp.1067-1075 (2 September 2007)
 URL <http://www.nature.com/ni/journal/v8/n10/full/ni1506.html>

核融合への教育研究で日仏五機関が連携



協定調印に参加した（左から）レイエ プロヴァンス大学副学長、プレシニヤックCNR S会長、梶山九州大学総長、本島NIFS所長、辻大阪大学理事。

平成十九年十月二十二日（月）、九州大学をはじめとする日仏の五機関は、核融合に関する基礎研究推進と人材育成を目的とした国際連携協定に調印し、「磁場核融合研究に関する国際連携研究所」（LIA）を発足させました。

連携協定に参加したのは、九州大学、大阪大学、核融合科学研究所（NIFS）、CNR S（フランス国立科学研究センター）、プロヴァンス大学の五機関です。協定調印式には、文部科学省の林文部科学審議官、フランス工学アカデミーのギノール会長など、日仏の関係者約二十名が列席しました。

LIAの当初の研究テーマは、ITER（注）への応用を視野にいれて、プラズマの輸送現象の電磁効果に焦点を絞った研究としており、同時に、核融合に関する世界的若手育成にも寄与していきます。

LIAには、日仏から共同ディレクターがそれぞれ一名ずつ置かれ、日本のディレクターは九州大学の伊藤早苗教授、フランスはプロヴァンス大学のベンカダ教授です。交流のシンボルとなる日本オフィスは、九州大学応用力学研究所に設けられ、二〇〇八年の第二回ITER国際サマースクールは、九州大学で実施される予定です。



応用力学研究所内に設けられたLIA日本オフィスでの開所式

伊藤教授の談話

プラズマ物理・核融合研究において、九州大学が世界一流の研究拠点（COE）であることを示していただいたことは嬉しい限り。ここで世界一流の研究に触れ、直接携わることによって、若い人材が世界的リーダーへと育っていくと信じます。



（注）ITER：国際熱核融合実験炉
平和利用のための核融合エネルギーの実現可能性の実証を目指す大型国際共同プロジェクト。参加国は日本、欧州連合（EU）、ロシア、アメリカ、中国、韓国。建設地は、フランスのカダラッシュに決定されている。
NIFSのホームページより

LIA日本オフィスで（左から）ベンカダ教授、プレシニヤック会長、伊藤教授。

世界の十二大学が集いサミット開催

九州大学は、平成十九年十月二十七日（土）と二十八日（日）の二日間に行われ、二〇〇〇年以来二回目となる「大学サミット・イン・九州二〇〇七」を開催しました。

三つのセッションとサミット宣言

今回の参加大学は、九州大学を含む十一カ国の十二大学。

「都市と大学」大学がいかに地域に貢献できるか」をテーマに、

学研都市の未来
地域資源としての大学をグローバルに考える

地域医療と健康問題における大学の役割

について、三つのセッションで、各大学や地域の事例発表、質疑応答、伊都キャンパス見学会などが行われました。



伊都キャンパス視察

二十八日（日）のクロージングセッションでは、環境保全への寄与、

国際紛争の平和的解決への貢献など大学の担う役割を確認し、これらの目標達成のための活動として

長期的戦略に基づくキャンパス設計と知見や情報の学内外への提供
食料など地球規模の問題や地域の問題解決のための国際ネットワークの構築

保健や公衆衛生問題解決のための運動展開と医学教育研究の推進、倫理問題への対応

などを謳った「大学サミット・イン・九州二〇〇七年宣言」を採択。

梶山総長が「今回の会議で、大学が果たすべき役割について、大学間の知的協力関係の構築と若い世代の育成の重要性が再確認できた。この宣言を広く社会に発信していきたい」と挨拶して閉会しました。

UNIVERSITY SUMMIT IN KYUSHU 2007



一同に会した各大学の学長たち。

参加大学

- サンパウロ大学（ブラジル）
- 上海交通大学（中国）
- ミュンヘン大学（ドイツ）
- インド工科大学マドラス校（インド）
- ガジャマタ大学（インドネシア）
- テヘラン大学（イラン）
- ソウル大学校（韓国）
- サンクトペテルブルグ大学（ロシア）
- チュロンコン大学（タイ）
- ミシガン大学（アメリカ合衆国）
- 早稲田大学（日本）
- 九州大学（日本）

来賓

- 加藤 敬
文部科学省 科学技術・学術政策局
国際交流官

野田 順康

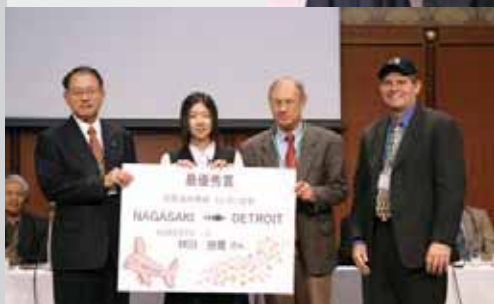
国際連合人間居住計画（ハビタット）
アジア太平洋事務所（福岡）所長

対話集会に参加した高校

- 済美高等学校（愛媛県）
- 東筑高等学校（福岡県）
- 泰星高等学校（福岡県）
- 東筑紫学園高等学校（福岡県）
- 香住丘高等学校（福岡県）
- 城南高等学校（福岡県）
- 筑紫丘高等学校（福岡県）
- 長崎東高等学校（長崎県）
- 熊本マリスト学園高等学校（熊本県）
- 鹿本高等学校（熊本県）
- 指宿高等学校（鹿児島県）

高校生との 対話集会

二十八日(日)には、県内外の十一の高校から八十五名の高校生が参加して、世界の学長たちと高校生との対話集会も開催されました。また、「大学生になった時、世界に対してできること」をテーマに募集した高校生の懸賞論文表彰式(最優秀賞受賞者は、今回の参加大学中の希望する大学へ短期研修)や、協定校から九州大学に来ている留学生たちと高校生の交流会が催されました。



懸賞論文表彰式。最優秀賞を受賞した林田由夏さん(長崎東高校・写真下の左から二人目)は、ミシガン大学での短期研修が決まった。

HUBER ミュンヘン大学長

Q 大学での教育の目的は?

A 専門分野に加えて社会問題に対応できる知識を蓄えること。



KIRANA NANDANA
チュラロンコン大学長

Q 夢を追う者に必要なことは?

A 夢は目標を実現させる力になる。世界の未来を担うあなたたちは、世界中の人たちと互いに理解し尊重し合うこと。それが平和な世界を創る。



対話集会の様様



交流会で



<http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/summit2007/>

光と水の伊都未来都市構想 第一回総会

平成十九年九月六日（木）、九州大学医学部百年講堂において産学官連携コンソーシアム「光と水の伊都未来都市構想」の第一回総会が開催されました。

本コンソーシアムは、九州大学（大学院工学研究院応用化学部門、未来化学創造センター）創出の先導的技術を、産業界及び行政との連携協力によって社会が求める実用化技術へと高め、環境に調和し、夢にあふれる未来都市創出を目的として平成十九年三月一日に設立され、「光」、「ナノテク」、「エコ」、「バイオ」の四つの部会で構成されています。福岡県、福岡市、ナノテク支援関係プロジェクト、水素エネルギー関係プロジェクト、福岡県工業技術センター、福岡県産業・科学技術振興財団、九州大学学術研究都市推進機構などと連携しながら、ナノテク技術を応用

した種々の社会的要望の高い技術の開発及び実証を行います。コンソーシアムには、九月五日現在で一七社の企業が参加しています。総会は、一〇〇名を超える関係者が参加して開催され、本コンソーシアムの活動方針や九州大学学術研究都市構想、伊都キャンパスの近くに福岡市が建設中の「産学連携交流センター」が紹介され、引き続き行われた講演会では久留米リサーチパークの芳賀慶一郎氏が「久留米都市エリアの産学官連携事業」を、

本学の大学院工学研究院応用化学部門・今坂藤太郎教授が「ダイオキシン計測装置の開発と事業化」を、（株）デンケンの日浦昭二氏が地域新生コンソーシアム事業の成果として「水蒸気電気分解装置の開発」について語り、講演後にそれぞれ設けられた質疑の時間では活発な質疑応答がなされていました。



写真上：コンソーシアム代表 北條教授
写真中：(株)デンケン 日浦昭二氏
写真下：講演会での質疑の模様

源田 芸術工学研究院教授が 外務省主催「グローバル・ユース・ イクスチェンジ事業」で講義

平成十九年九月四日（火）、日本に招聘された外国青年に対し、大学院芸術工学研究院・源田悦夫教授が講義を行いました。これは、外国青年を日本に招聘し、日本の青年も交えて、国際的な相互理解を深めることを目的として、外務省主催で開催された「グローバル・ユース・イクスチェンジ事業」の一環で行われたものです。

講義は、大橋サテライト「LUNETTE」（ルネット）と大橋キャンパスで行われ、日本を含む世界二十四ヶ国・地域から参加した二十六名に、同教授が中心となって実施している「先導的デジタルコンテンツ創成支援ユニット」の最新研究成果を紹介、高次のデザインを生み出す特殊機器を備えた総合研究棟の見学を行いました。

参加者は、初めて目にするデジタルコンテンツ制作の現場に興味津々の様子でした。



3次元全身デジタイザを体験する参加者

第四回 S I A・DAY「高樹のぶ子と浸るマレーシア」を開催

第四回の S I A DAY (サイア・デイ) が、平成十九年九月二十二日(土)、アクロス福岡・円形ホールで開催されました。今回の対象国はマレーシアで、テーマは「多民族モザイクの輝き」。一般参加者と学生約一七〇名で会場は満員となりま



参加者に語りかける高樹のぶ子教授

した。

S I A (Soaked in Asia)とは、九州大学アジア総合政策センター特任教授で作家の高樹のぶ子氏のイニシアティブによるプロジェクトで、レクチャー、現地作家との対談と作品紹介、朗読、フォトデッセイ(写真とエッセイ)などにより、「作家の感性で現代アジアをつかみ取り、広く発信する」ことを狙いとするものです。

この日は、マレー系・中国系・インド系の住民が交わらずにモザイクのように混在するマレーシアの社会や宗教についてのレクチャー、マレーシアの華人作家である李天葆(リ・テンポ)氏が中国系マレー人女性の半生を描いた小説『写真の中の人』やそれに呼応して高樹教授が書いた短編小説『どしゃぶり麻玲』の朗読、マラッカの夕日やセラランゴールの蛍の光が投げかける熱帯の幻影のフォトデッセイなどが主な内容でした。休憩時間には「おやつ S I A」が行われ、マレーシアのお菓子やミルクティーが振る舞われました。朗読された二つの作品は、同時

に発売された文芸誌『新潮』(十月号)にシリーズで掲載されており、フォトデッセイも近々『文藝春秋』に掲載される予定です。また、これらの映像や文章は、最近オープンしたg o o上の高樹のぶ子氏のブログを通して世界中に発信されることになっています。

なお、今回から S I A が大学院の共通教育科目の単位として認定されるようになりました。異なる学部から集まった受講生は、S I A に聴衆として参加した後、高樹教授を囲んでの直接対話を行いました。熱帯アジアの気候と国民性、モザイク国家の行方、文学が伝えるものなどについて、高樹教授と学生の活発な議論が交わされました。(下左の写真)

S I A DAY は年に二回企画されています。次回は来年三月二十二日開催で、テーマは「上海」の予定です。

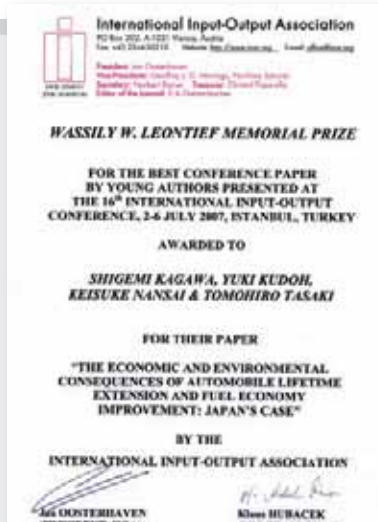


加河茂美 経済学研究院准教授

レオンチエフ記念賞を受賞

平成十九年七月六日（金）、経済学研究院の加河茂美准教授が国際産業連関分析学会（International Input-Output Association）からレオンチエフ記念賞を授与されました。同賞は、産業連関分析の創始者で、一九七三年ノーベル経済学賞受賞者のワシリー・レオンチエフの功績を記念して設けられた賞で、国際産業連関分析学会（IIOA）世界大会での論文コンペで贈られる最優秀論文賞です。

本論文では、異時点の最終需要の間に内在する動学的関係を明示的に扱うことができる構造分解分析の新



Copyright(C) 横山一代

手法を開発し、それを乗用車の使用年数の延長が環境と経済に及ぼす影響とその構造を定量的に把握するという、現実的な問題の解明を行っている点が高く評価されました。

加河准教授は「この度、ノーベル賞を受賞した偉大な研究者の名前を冠した賞を頂き、本当に嬉しく思っております。ありがとうございます。」と喜びを語っていました。

学生グループが日本建築学会最優秀賞 および島本源徳賞を受賞

日本建築学会主催の設計競技「人口減少時代のマイタウンの再生」において、本学人間環境学府の学生グループが、全国から三一作品の応募があった中で最優秀賞および島本源徳賞を受賞しました。受賞作品「分校が集まる島」は、

学生は、空間システム専攻修士課程一年の牟田隆一さん、吉良直子さんと都市共生デザイン専攻修士課程一年の多田麻梨子さん、原田慧さんです。

博多湾に浮かぶ能古島を敷地とし、普段の教室ではできないような自然学習を行うために、福岡市内の小学校がそれぞれ小さな分校を作るという提案です。こどもたちの楽しい生活がイメージできる仕組みや、高齢化が進む地域を活性化させる可能性、一つの集落のような親しみやすい空間などが高く評価されました。参加



受賞作品「分校が集まる島」

女性研究者支援室の話題

支援室設置とセミナー開催

平成十九年度科学技術振興調整費女性研究者支援モデル育成事業に、本学の「世界に羽ばたけ！ 女性研究者プログラム」が採択されました。これを機に、本学では女性研究者支援室を新設し、本格的な女性研究者支援を始動させました（支援室の場所は旧工学部本館二階です）。

去る八月二十八日（火）には、女性研究者支援室主催で第一回セミナー「九州大学における女性研究者支援の本格化に向けて」を開催しました。モデル育成事業で先行する東北大学と本学の男女共同参画の取組を報告し、最後に、本事業の今後の実施予定を紹介しました。当日は、学内の女性教員・大学院生を中心に三十名を超える参加者を集め、講演後の意見交換会では、活発な議論が交わされました。十月十六日（火）には第二回セミナーを実施し、第三回セミナーは十二月十九日（水）に開催の予定です（詳細はホームページをご参照ください）。

今後は交流会やセミナーの実施と共に、多忙な女性研究者への研究補助者派遣や若手女性研究者を対象とした国際学会派遣支援等のプログラムを実施していく予定です。



セミナーの様子



広島大学担当者との情報交換



支援室のメンバー（於：女性研究者支援室）

女性研究者支援室

お問合せ先 o ce@sofre.kyushu-u.ac.jp

URL <http://sofre.kyushu-u.ac.jp>

「男女共同参画学協会連絡会シンポジウム」でポスター賞を受賞

自然科学分野における男女共同参画の実現をめざして設立された「男女共同参画学協会連絡会」の「第五回シンポジウム・真の男女共同参画へ向けて 意識を変えよう！」が、名古屋大学において十月五日に開催されました。内閣府男女共同参画局長坂東久美子氏らの参加による全体会議、三つの分科会とともに、ポスター展示が行われました。各学協会、科学技術振興機構、日本学術振興会、文部科学省科学技術振興調整費、女性研究者支援モデル育成「採択校の約五十団体が、「各団体の取組を紹介する」ポスターを出展しました。七団体が表彰され、九州大学女性研究者支援室（SOFRE）は、「ユニーク賞」を受賞しました。



「ユニーク賞」受賞



授賞式で表彰状を受取る作成者の女性研究者支援室 佐々木圭子



九州大学女性研究者支援室のポスター

スーダンから世界を見る



ロシナンテス診療所外観（左ハルツーム、ロシナンテス事務所そばで川原さんと（右

平成十九年八月末から九月頭までの約一週間、スーダンで医療分野を中心に活動されている「NPO法人ロシナンテス」さんの所でお世話になってまいりました。その内、数日をロシナンテスさんがスーダン東部のハサバラ村で運営されている診療所で過ごさせていただいたのですが、そこでの生活は考えさせられるところも、感じるところも本当に多いものでした。

スーダンでは五歳までに四人に一人の子供が命を落とし（死因の四分の一はマラリア）、平均寿命も五十歳以下といわれています。村部においては、電気、水道、下水道など基本的インフラがなく、病院もないため衛生状態は都市に比べ良くなく、さらに村人の衛生観念も欠如しています。このような村において川原尚行先生を中心とするロシナンテスの皆さんが取り組まれていることは、「診察」「治療」といったような、まさに医療的な活動だけでなく村人の衛生観念を育てる事、または診療所、「診療」というシステムを村に浸透させていくという事でもありました。しかし、それは言葉で言うように簡単な事ではなく、川原先生をはじめロシナンテスの皆さんの村での熱意に裏打ちされた、日々の積み重ね、その中での新しい試み、悪戦苦闘の産物に他なりません。このような村の診療所は、村の人々の現在の健康だけでなく、彼らの将来、彼らの社会の将来にも大きな影響を与えるものだと思います。

川原先生は医師ですが、彼を中心としたスーダンでの活動は、医師としてのそれに留まらず、そこに国際的な支援活動における、支援する側、支援される側という単純な構造ではない現実の人間同士の関わりが透けて見える気がしました。

最近のスーダンに関するニュース等に、良いものは決して多

伊都地区の話題

九大・糸島会交流事業

「地引網とバーベキュー大会」

九州大学と糸島地域との交流を促進し、もって共に発展していくことを目的として平成十四年二月二日に「九大・糸島会」は結成されました。メンバーは糸島地域にゆかりのある九州大学教職員と前原市、志摩町及び二丈町の関係職員とで構成されており、毎年大きく分けて三つの事業が展開されています。

まず、糸島地域の魅力を地元住民に再認識してもらう「地域資源再発見塾」。主に糸島地域に関連したテーマで講演会を開催しており、毎年参加者も増加し地域で定着してきています。次に、大学関係者に糸島地域の魅力に触れてもらい、また地域住民とのふれあいを目的とし





くありません。このような状況でスーダンに対して「いい印象」を持たれる方は多くないでしょう。むしろ悲惨な状況を思い浮かべられる方が多いのではないかと思います。

しかし、実際にこの国を訪れ、見たこと感じたことは、それ以前の自分が抱いていた漠然とした印象を十分に壊してくれるものでした。村人の少しはにかんだ笑顔、彼らの振る舞いや、話す言葉、村全体を包むように照らす夕日。村には電気も水道も下水道もありませんが、今の日本には無くなってしまった様なものが、そこにはあるような気がし、私の心は今でも強く惹きつけられています。おそらくロシナンテスの皆さんも少なからず同じ感情を抱かれていますのではないかと思います。

スーダンでの数日間は、私が縛られていたそれまでの視点とは別のものを与えてくれました。またスーダン自体も現在大きな変化の中にあると思います。このような時期にスーダンという国やその人々と出会えた事は私にとって大きな意義があることだと思えます。またスーダンの人たちと会える日まで、この経験を大事にしていきたいです。

法学部三年 沖 祐太郎

沖 祐太郎さん プロフィール

平成十六年 九州大学法学部入学。平成十七年八月から一年間九州大学を休学。エジプト政府奨学金制度を利用して一年間カイロに留学しアラビア語を学ぶ。同期間中、パレスチナ系ヨルダン人、イラク人、スーダン人などと共に暮らしアラブ世界が抱える多々の問題に触れる機会を得る。平成十八年八月に帰国し、十月より九州大学に復学。平成十九年二月から三月にかけて一ヶ月間再びエジプトを訪れ、再度アラビア語を学ぶ。

川原尚行氏とNPO法人「ロシナンテス」の活動については「九大広報」四十八号にインタビュー記事を掲載しています。



た「糸島ふれあいバスツアー」。これは、大学と地域住民が同じ時間を過ごすことによりお互いをより身近に感じることができるともあり、毎年多数の方々に参加しています。そして、今年九月二十九日（土）に開催された「会員交流事業」。これは、九大・糸島会の会員同士の交流を深める目的で毎年開催しており今回で六回目となります。今回も大学からは梶山総長、末岡工学研究院長ほか教職員と家族、学生合わせて四十人、地元からは松本前原市長、末崎志摩町長、内場二丈町副町長ほか四十九人の総勢八十九人の参加があり志摩町の海岸で地引網をしたあと、捕れた魚や新鮮な野菜、鶏、肉、サザエなど汗まみれになってパーベキューを楽しみました。特に今年は工学研究院三浦研究室の学生参加もあり、いつもより増して活気に満ちあふれていました。

大学と地域との交流はすでに様々なところで行われています。九大・糸島会も大学と地域との交流を積極的に促進し、九州大学が糸島地域の新しい魅力のひとつとなるよう、今後も様々な活動が展開されます。

同窓会の話題

第三回九州大学東京同窓会ゴルフコンペ報告

平成十九年十一月一日（木）

「よみうりゴルフ倶楽部コース」
で第三回九州大学東京同窓会ゴルフコンペを開催しました。

第一回は十八名、第二回は二十三名、今回は二十三名と次第に参加者も増加し、交流の輪を広げることができました。

優勝は農学部昭和四十三年卒の木村省三氏（竹中土木）、第二位は工学部昭和四十二年卒の江口宏氏（ニッコウソフト）、第三位は工学部昭和三十九年卒の伊藤俊介氏でした。

最高齢八十四才の医学部昭和二十五年卒の吉利正勝氏の乾杯に引き続き、副会長の増田信行氏（三菱重工相談役）より、九州大学百周年記念事業への協力の依頼、平成十九年十二月十二日の北海道大学と九州大学の合同活動報告会、平成二十年一月十七日の新年賀詞交歓会への参加要請がありました。

また、今回も法学部昭和四十六年卒の末広秀孝様（三越役員）より十数万円相当の賞品を提供して頂き大変助かりました。その他農学部昭和四十三年卒の深山伸行様

から「紅乙女」、増田信行様から「賞金」、東京同窓会不動産グループから「太宰府」地元焼酎を寄贈いただきました。厚くお礼申し上げます。

ゴルフの後のパーティも和氣藹々のうち終わり、来年十一月「第一木曜」に第四回のゴルフコンペを予告して散会しました。

東京同窓会常務理事

星山 芳幸



九州大学学生寮同窓会地区別懇親会について

平成十九年七月に、九州大学学生寮同窓会の地区別懇親会が関東、中部、関西、九州の四地区で開催されました。以下、各地区幹事からの報告を掲載いたします。

九州大学学生寮同窓会会長 高橋 義人（理学部 昭和五十九年卒業）



七月二十一日(土)に第十三回関東地区会懇親会が開催されました。例年は七月の第四週に開催しているのですが、今回は、全国同時開催にすることによって一週早い七月の第三週に行いました。今回は、福岡から樋渡和浩副会長が飛び入りで参加されました。参加者の中には、二〇〇六・二〇〇七年卒の方や、御殿場から遠距離参加していただいた方もいました。参加してくださった方、ありがとうございました。来年もよろしくお願ひします。参加できなかった方、残念ですが、また来年ぜひ集まって楽しいお酒を飲みましょう。

関東地区幹事 梅小路 学(法学部 平成元年卒業)

七月二十日(金)に、第九回中部地区会懇親会が豊田市で開催されました。今年も盛り上がりました。年一回の開催ながら、今回出席のメンバーはいつも開催することを、気にかけていただいております。大変ありがとうございます。来年もまた、開催しますので、中部地区にお住まいの方、もしくは転勤等で、引越してみえた方がいらっしゃいましたら、来年の会には、ぜひ、参加してみたいかでしょうか?お待ちしております。

中部地区幹事 宮本 幸一(工学部 昭和六十三年卒業)

九州大学学生寮同窓会とは

九州大学学生寮同窓会は九州大学松原寮同窓会として一九八四年に設立され、二〇〇六年より九州大学学生寮同窓会と名称を変更し、松原寮以外の田島寮、井尻寮、貝塚寮、ドミトリーにゆかりの皆様にも門戸を開きました。九州大学での寮生活を体験したという共通体験を大切に、卒業後も寮生どうしのつながりをもちたいという積極的な人会希望者からなる同窓会です。九州大学同窓会連合の会員にも加えていただき、微力ながら母校九州大学の発展にも寄与することをめざしています。現在、会員は全国津々浦々、三〇〇名を超え、九州大学のほとんど全ての学部、学科の卒業生を有するユニークな同窓会でもあります。

七月二十一日(土)に第七回関西地区会懇親会が開催されました。今回は新顔の方、重鎮の先輩方と九十年代卒の中堅での楽しい会となりました。会は近況を伝え合つての楽しい酒となり、懐かしい思い出の時と場所を共有するメンバーでのほのぼのとしたひと時となりました。学生時代の外食、四方山話で「玄海嵐」や「朝倉」、そして懐かしい「若松」等々で盛り上がることしきりでした。

関西地区幹事 山口 良二(工学研究科 平成四年修了)

七月二十一日(土)に第十二回九州地区会懇親会が開催されました。世代を超えて集まったから話がでける共通項について、当時を思い出しながら話しました。恒例の関東地区同窓会との「携帯通信」も行いました。関東地区同窓会が盛り上がりつつある様がよくわかりました。

九州地区幹事 吉富 浩(理学部 平成元年卒業)



九州地区会懇親会



毎年6月の田島寮祭では樽神輿(たるみこし)が街へくり出す。

二人の化学研究者に栄誉

平成十九年秋、二人の名誉教授に、紫綬褒章と文化功労者の吉報が届きました。

【紫綬褒章】

入江正浩（いりえ・まさひろ）名誉教授（平成十九年三月九州大学を定年退職）は、分子光化学分野の功績により、紫綬褒章を受章しました。

特に、「光応答性高分子」の基本概念の提唱、特定の波長の光を受けることで変色したり別の光の照射で元の色に戻る「フォトクロミック分子材料」の開発で中心的役割を果たしました。これまで高分子学会賞、光化学協会賞、日本化学会賞など国内外の多くの賞を受賞し、平成十五年十二月には、九州大学の協定校であるポルドー第一大学から名誉博士号を贈られています。（右写真の右）

【文化功労者】

国武豊喜（くにたけ・とよき）名誉教授（九州大学停年退職直後の平成十一年四月から北九州市立大学副学長）が、高分子化学、分子組織化学分野の多大な功績により、文化功労者に選ばれました。

特に「分子自己集合」のバイオニア、「合成二分子膜」の形成などによる分子組織化学の開拓者として、国武名誉教授の名は世界に知られています。これまで、高分子学会賞、日本化学会賞、紫綬褒章、日本学士院賞などを受賞しており、平成四年四月から二年間は九州大学工学部長を務めました。（左写真）



ようこそ九州大学へ Welcome to Kyushu University



韓国人的資源部女性教育政策課 教育行政官

徐映珠 韓国人的資源部生涯学習局女性教育政策課長以下五名の韓国教育行政官が、平成十九年八月三十日（木）、柳原理事（国際交流・留学生担当）を表敬訪問しました。

今回の訪問は、文部科学省から日韓間の教育に関する相互理解と交流を強化・促進し、教育事情・教育機関の視察及び教育関係者との懇談を目的として本学に依頼があったもので、伊都キャンパスを見学の後、貴賓室において、九州大学の概要、入試制度、知的クラスター創出事業及び地方大学コンソーシアムについて説明があり、その後活発な意見交換が行われました。

ASEAN次期事務局長

タイ王国元外務大臣で来年一月にASEAN事務局長に就任予定のスリン ピスワン博士が、平成十九年九月二十一日（金）梶山総長を表敬訪問しました。

今回の訪問は、JICAが同人を招聘した機会に本学を訪れたもので、柳原理事（国際交流・留学生担当）から、九州大学の概要及びASEAN諸国の大学との交流状況等について説明があり、その後、特に本学のATW等を含め留学生の交流について、活発な意見交換が行われました。

マヒドン大学学長（タイ）

平成十九年十月四日（木）、ポンチャイ・マタンカソンプットマヒドン大学学長が、梶山総長を表敬訪問しました。

ポンチャイ学長が一九九九年に学長就任以来、アジア学長会議、JSPSアジア研究教育拠点事業などで本学と深い交流が行われていますが、本年末でポンチャイ学長の任期が満了することに伴い、退任挨拶及び学術交流協定更新手続きなどのため来学しました。

今後の更なる交流の一環として、十一月にマヒドン大学内に本学のブランチャオフィスが設置されることなどについて活発な意見交換が行われました。

告知板

07年12月12日(水)

九大・北大合同活動報告会 北と南から日本が変わる教育新時代

九州大学と北海道大学は、両大学の活動に対する社会の関心・理解をより一層深めるため、「北と南から日本が変わる教育新時代」と題し、合同活動報告会を開催することといたしました。

過去二回開催いたしました合同報告会では、二十一世紀COEプログラムをはじめとする両大学の先進的な研究活動の報告、パネル討論等を通じ、今後の学術研究活動への新しい基軸を社会に提案できたと考えています。

今回は報告会を通じて、両大学が、国際社会で指導的役割を果たす人材の育成を担う南北の教育研究拠点として、更なる可能性を創出しつつあることを社会に向けて発信したいと考えており、皆様に九大・北大の教育をはじめとする活動状況をお知らせできるよい機会であると思っております。

また、この報告会を契機に両大学は更に交流を深め、互いに切磋琢磨、連携協力する関係を築き、今後の飛躍につなげてまいります。是非ご参加ください。

日時：二〇〇七年十二月十二日(水) 十三時三十分～十七時四十分

場所：都市センターホテル三階 コスモスホール 東京都千代田区平河町一丁目四番一号

開演：十三時三十分

テーマ：「北と南から日本が変わる教育新時代」九州大学・北海道大学合同活動報告会

入場料：無料

定員：二五〇名

主催：九州大学、北海道大学

共催：九州大学同窓会連合会・東京同窓会、北海道大学連合同窓会・東京同窓会

<http://www.kyushu-u.ac.jp/education/2007/inv.html>から

申込書をダウンロードすることができます。メールにてお申し込みの方は、左記の事項を学務企画課(gakikaku@jinu.kyushu-u.ac.jp)宛にお送りください。

記載事項

お名前(ふりがな)、会社・機関名、所属部署・職名

「連絡先」ご住所、郵便番号、電話番号、メールアドレス

参加するプログラム名

十三時三十分～十五時二十分 両校総長挨拶・文部科学省挨拶・活動報告

十三時三十分～十七時四十分 講演・パネルディスカッション「大学への期待」

十八時～十九時三十分 交流会(別途会費六千円をいただきます。)

参加・不参加
参加・不参加
参加・不参加

プログラム

13:30~	挨拶および大学紹介 北海道大学総長挨拶 佐伯 浩 北海道大学総長 九州大学総長挨拶 梶山 千里 九州大学総長
13:50~	文部科学省挨拶 大学に期待すること 清水 潔 文部科学省高等教育局長
14:10~	1年間のトピックス 北海道大学の1年間のトピックス 脇田 稔 北海道大学理事・副学長 九州大学の1年間のトピックス 山田 耕路 九州大学理事・副学長 特別活動報告 北大・九大連携プロジェクト構想 今脇 資郎 九州大学応用力学研究所長 教授
15:20~	休憩
15:30~	パネルディスカッション「国際化時代の大学院教育とキャリア形成」 〔パネラー〕 沢 邦彦 富士電機ホールディングス株式会社 相談役 橋爪 秀一 森永製菓株式会社研究所 技監 川端 和重 北海道大学大学院理学研究院 教授 谷川 徹 九州大学産学連携センター 教授・総長特別補佐 〔コーディネーター〕 小笠原正明 東京農工大学 教授
17:10~	「大学への期待」(同窓会から) 北海道大学 数土 文夫 JFEホールディングス株式会社 代表取締役社長 九州大学東京同窓会会長 九州大学 近藤 秋男 全日本空輸株式会社 最高顧問
18:00~	交流会



内容に関するお問い合わせ

九州大学学務部学務企画課
北海道大学学務部教務課

TEL : 092-642-7123

TEL : 011-706-5251・5249

8月

文科省の優れた教育プログラムに採
択 九大の医療コンテンツプロデ
ューサー育成事業など
(日経 7/31)

九州大学ユーザサイエンス機構と
熊本県が協定 ユニバーサルデザイ
ン
(西日本 熊本日日 日刊工業 8/1)

九州大学工学部公開講座
「ふね・舟・艇・船」
(毎日 8/1)

道草は貴重な自由時間 子育て講座
南博文人間環境学研究院教授
(西日本 8/1)

被爆者の記憶を未来に
直野章子比較社会文化研究院准教授
(長崎 8/1)

九大で学生や病院患者らの個人情報
流出
(読売 朝日 毎日 日経 佐賀 長崎 大分台
同 南日本 夕刊アライ 8/1, 2)

戦災児童の歯を守りたい
「ドイツ国際平和村」で診療開始
九大病院の医師や歯学部生ら 久保
敬司歯学研究院准教授
(西日本 読売 8/2, 7)

秀村選三名誉教授に日本学士院賞・
恩賜賞 薩摩藩の農業と社会
(読売 8/2)

「絵本カーニバル」開催 ユーザー
サイエンス機構 熊本県上益城郡で
(熊本日日 8/2)

デンセイ・ラムダが九大と次世代電
源開発
(サンケイビジネスアイ 8/2)

参院選を終えて 居直る首相「裸の
王様」 出水薫教授(政治学)
(朝日 8/3)

二人組みの強盗 九大留学生が撃退
(毎日 朝日 西日本 8/4)

被占領下の国語教育と文学
検閲資料基にシンポ
九大と米メリーランド大
(西日本 読売 8/4, 9)

医を診る「チーム制」実践で習得
医学教育 吉田素文医学研究院教授
(朝日 8/4)

「これからのキャンパスデザイン」
発行 九州大学新キャンパス計画推
進室
(日経 8/4)

小学生が里山探検
伊都キャンパスで
(西日本 8/5)

転倒予防の靴下開発へ
健康科学センター
(西日本 8/5)

私の履歴書 森澄雄
戦火迫る中、九州大学へ入学
(日経 8/5, 9)

佐賀県呼子の古民家調査
九大の研究者ら
(佐賀 8/7)

九州大学法科大学院
新しい時代・社会を創る
(読売 8/7)

原発地震災害の意味するもの
安定供給の危うさ実証
吉岡齊比較社会文化研究院教授
(南日本 8/7)

地震をテーマに講演会
伊都キャンパスで
(西日本 8/8)

農作物国際価格が高止まり
増産へ競争激しく
伊東正一農学研究院教授
(日経 8/9)

大濠公園 ひまわり写生大会
片山雅史芸術工学研究院准教授
(西日本 8/9, 18)

宇宙工学を学ぶためにM1Tへ留学
九大大学院の高橋奈菜子さん
(西日本 8/10)

メタボリック症候群についての講座
開催
(西日本 8/10)

芸術工学研究院長に安河内朗氏再任
(西日本 8/11)

六本松キャンパス跡地利用
市が利用計画説明
(西日本 8/11)

先端融合医療レドックスナビ研究拠
点が開所 生活習慣病・がん等を研
究
(日経 8/11)

医を診る 医学教育 三側面で系統
的育成 吉田素文医学研究院教授
(朝日 8/11)

女性のメタボ規準「大きすぎ」
九大分析 林純医学研究院教授
(朝日 8/12)

全国初「田んぼ力検定」開催
九大で
(朝日 西日本 8/12, 20)

まちづくりフォーラム開催
志摩町と教育学部が共催で
(西日本 8/14)

矯正歯科市民公開講座 九大病院
(日経 8/14)

八十人が白熱のラリー
九大バドミントン愛好会OB大会
(西日本 8/14)

戦争は人を狂わせた
九大生体解剖事件 東野利夫さん
(朝日 8/15)

九大演習林で 里山森林体験講座
(西日本 8/16)

日本気象学会 九大西新プラザで
(朝日 8/16)

中越沖地震一ヶ月
九州の防災に警鐘
(毎日 8/16)

中国大学事情 日本社会に国際化迫
る 白土悟留学センター准教授
(読売 8/17)

田村圓澄名誉教授 講演会
(西日本 8/17)

医を診る 意思疎通の能力不可欠
医学教育 吉田素文医学研究院教授
(朝日 8/18)

肋間神経痛 背景に様々な疾患
吉良潤一医学研究院教授
(西日本 8/19)

バン格拉デシヨンのNPOグラミン・
コミュニティシヨンスと九大が交流
協定 貧困解消へ
(熊本日日 8/20)

朱子学の祖・桂庵禪師を研究
東英寿比較社会文化研究院教授
(南日本 8/20)

「わくわくドキドキ化石の秘密展」
九大博物館
(朝日 8/20)

九大と韓国釜山大が共同講座 日韓
関係テーマに 国立大で初
(西日本 読売 日刊工業 8/20, 24, 28)

化学・生物兵器戦争の世紀
井上尚英名誉教授
(夕刊アライ 8/21, 22, 23, 24, 25, 27,
28, 29, 30)

九州地域組み込みシステム協議会
九州横断で発足 九州大学など
(日経 8/22)

高樹のぶ子特任教授 SIA
出演番組をウェブから配信
(朝日 8/22)

地熱でハウス冷暖房 ヒートアイラ
ンド抑制 藤井光工学研究院准教授
(西日本 8/22)

ミュージカル卑弥呼
九大生の運営委員が札幌から招く
(西日本 朝日 8/22, 24)

九州アジアラウンドテーブルを開催
(西日本 8/24)

フコイダンの抗腫瘍効果に注目
がん治療 統合医療脚光
白畑實隆農学研究院教授
(産経 8/24)

みやこ町育徳館高校卒の二人
九大から母校へ到着
(毎日 8/25)

九大マンドリンクラブ
同窓生が演奏会
(西日本 8/25)

名所で学生狙え 九大
「語る石」アート
(朝日 8/27)

加齢黄斑変性の治療法
石橋達朗医学研究院教授
(毎日 8/28)

前原市 九大伊都キャンパス隣に研
究所用誘致 用地取得
(西日本 毎日 8/28, 30)

九州大学演劇部公演
「ドライブインカリフォルニア」
(日経 朝日 8/28, 30)

私の視点 臨床試験 系統立てすべ
てに法規制を 笹栗俊之医学研究院
教授
(朝日 8/29)

人文科学研究院・社会連携セミナー
(西日本 8/29)

九州大学吹奏楽連盟
第二十五回合同演奏会
(朝日 西日本 読売 8/30)

九大の水素研究
伊都キャンパスで説明会
(西日本 8/31)

建築と街考えよう 九大でシンポ
(西日本 8/31)

福岡・釜山フォーラム
梶山千里総長
(西日本 8/31)

第四回SIAーDAY 「マレーシ
ア」 高樹のぶ子特任教授
(西日本 8/31)

9月

日韓の大学生 「観光」を議論 福
岡でサミット 九州大や東西大など
(西日本 9/1)

地域再生のために 住民自治 新し
い「公共」つくろう 藪野祐三法学
研究院教授
(西日本 9/1)

福岡・釜山フォーラム
九大と釜山大の提携など
経済・教育で情報発信
(西日本 9/1, 2)

高樹のぶ子特任教授 アクロス福岡
でマレーシアの文学を紹介 SIA
(毎日 読売 西日本 9/14、6)

糖尿病は万病の温床
久山町研究で十五年間の調査
清原裕医学研究教授
(朝日 9/12)

県政二十年学び直す原点
九大大学院生で県議の蔵内勇夫さん
(朝日 9/12)

飼料ではなく草で育てる 「放牧牛
肉」進む取り組み 農学部附属農場
後藤貴文農学研究院准教授
(西日本 9/13)

アレルギー発症抑制の機構解明
福井宣規生体防御医学研究所教授
(毎日 南日本 日経 西日本 朝日 フジサン
ケイビシネスアイ タリデイリ 沖縄タイムス
9/13、4、5、6、12)

大学発ベンチャー 福岡二位
九州大学など
(朝日 毎日 読売 9/4)

都市を冷やす屋上緑化 室内の熱量
大幅減 鈴木義則名誉教授
(熊本日日 9/4)

文科省方針 カミネ油症診療専門
機関を設置 「油症研究・診療セン
ター」 九大病院に
(読売 産経 日経 朝日 西日本 佐賀 長
崎 大分合同 熊本日日 高崎日日 9/4、
5)

水保病に「脳滋図」使用
医学研究院等倫理委員会
(熊本日日 日経 佐賀 高崎日日 9/4、
5)

車などのマイコン制御ソフト
「九州組み込みシステム協議会」
九州大など
(熊本日日 西日本 9/4、16)

大学院入試 入試論文を誤って廃棄
(毎日 朝日 西日本 読売 日経 南日本 山
口 9/5、6)

連続講座 「アート・オープン・カ
フェ」 芸術工学東京サイト
(朝日 9/10)

医療ルネサンス 病院の実力
前立腺がん 九州大病院
(読売 9/17)

大学院の教育支援
文科省が一二六件採択 九大など
(西日本 9/17)

「光と水の伊都未来都市構想」
産学官連携で始動 応用化学部門
(西日本 9/17)

佐賀玄海町に「薬草研究所」
町が建設、九大を誘致
(佐賀 9/18)

九州大学の久山町研究って？ 住民
の健康 六十一年前から追跡調査
(朝日 9/18)

医を診る 医学教育 まねて学ぶ医
療面接 吉田素文医学研究教授
(朝日 9/18)

芸術工学部がオープンカフェ アー
ト、ファッション、演劇、ゲーム：
(西日本 9/18)

九大病院に研究・診療センター
カミネ油症 古江増隆医学研究教授
授(班長)に聞く
(毎日 9/19)

サイエンスパブ
九大の天文学者が企画 福岡の居酒屋
で 山岡均理学研究助教授
(朝日 9/19)

支え合う社会が理想 自殺 神庭重
信医学研究教授
(西日本 9/19)

田村圓澄名誉教授
宗像の古代ひもとく
(西日本 9/19)

「ヒバクシャの心の傷を追って」
(中澤正夫著) 評者・直野章子比較
社会文化研究准教授
(北日本 佐賀 大分合同 長崎 9/19、16、
23、30)

九大ビジネススクール
福岡市で説明会
(西日本 9/11)

「弁当の日」
九州大学箱崎キャンパスで
(西日本 9/11)

九州大学仏教青年会
百周年記念行事
脳科学者の茂木健一 郎さんが講演
(読売 9/11)

もうひとつの戦後レジーム
生活政治が政治の基本
数野祐三法学研究教授
(西日本 9/11)

西日本新聞社が九大法学研究院に寄
付講座開設 地域貢献へ提携・協力
新聞を教材、現地調査も
(西日本 産経 9/11)

企業間連携・商取引支援システム開
発 雨宮真人教授、峯恒憲准教授
システム情報科学研究院
(日刊工業 9/11)

人工島 描く都市像明示急務
出口敦人間環境学研究院教授
(西日本 9/12)

博士の就職問題 理系白書
九大が支援センター
(毎日 9/12)

沖縄石垣島周辺サンゴ礁が白化
壊滅危機
野島哲天草臨海実験所准教授
(熊本日日 9/12)

食育空白世代 広がる弁当の日
九大で 背景探る
(西日本 9/13)

安倍首相の辞意表明 国民不在の退
陣劇 数野祐三法学研究教授
(西日本 9/13)

九州地域バイオクラスター推進協議
会 九州大などが参加
(日経 9/13)

糸島サイエンスキャラバン
九大の最先端の研究 前原で講演
(読売 9/13)

安部政権一年 終幕は突然に
施光恒比較社会文化研究准教授
(西日本 9/14)

中国ビジネスセミナー
アジア総合政策センター
(日刊工業 9/14)

犬並みの嗅覚 微量の爆薬検出する
小型装置開発 都甲潔システム情報
科学研究教授
(日経 9/15)

医を診る 医学教育 模擬患者に改
善点学ぶ 吉田素文医学研究教授
(朝日 9/15)

屋久島の森林 再生の跡追え
吉田茂二郎農学研究教授
(朝日 9/15)

医学部保健学科公開講座
メタボリック症候群の征圧について
(西日本 9/17、21)

九大校舎に侵入
窃盗未遂容疑の男逮捕
(読売 9/17)

中国のハンセン病問題に取り組む
九大生ら入所者と交流
(読売 9/19)

粕谷六町合併問題
魅力の九大農場跡
(西日本 9/19)

九大ビジネススクール 六期生募集
(日経 9/19、20)

森林教室 「九州山地の森と樹木」
宮崎県椎葉村の宮崎演習林で
(熊本日日 9/21)

九大病院別府先進医療センター
市民公開講座
(読売 9/21)

九大 東アジアの問題解決で中国・
韓国と連携 産学官で研究・人材育
成
(日経産業 日経 朝日 毎日 西日本 熊本日
日 9/21、22、23、25)

医を診る 医学教育 実技、模擬診
療で評価 吉田素文医学研究教授
(朝日 9/22)

脳死に伴う臓器移植 九州大病院
(西日本 9/23)

前原市「いとしま元気フォーラム」
九大学生らも意見交換
(西日本 9/23)

小説時評 松本常彦比較社会文化研
究院教授
(読売 9/24)

「九州大吟醸」人気上々
学生主体で製造から販売まで
(中国 タリデイリ 9/24、25)

ネットで時代探検
九州大学デジタルアーカイブ
膨大な資料で過去へトリップ
(大分合同 9/25)

近代化遺産を歩く 九大工学部本館
頭文さ際だつ 欧風建築
(朝日 9/25)

花粉飛ばないイネを開発
NAROが九大などと共同で
(フジサンケイビシネスアイ 9/25)

カミネ油症 センターで患者データ
解析 全国油症治療研究班長 古江
増隆医学研究教授
(読売 9/26)

大分県中津市民病院
外科医を九大が派遣
(大分 9/26)

九大などが主催 アジアデジタル
アート展 作品募集
(西日本 9/27)

工学部国際学術交流フォーラム
「パトリック・ゲデスの遺産」
(西日本 9/27)

健康講演会 「生体防御 元気に生き
るには」 野本亀久雄名誉教授
(毎日 9/27)

九州デザインスピリット コミュニ
ケーションが紡ぐファッション
池田美奈子芸術工学研究教授
(西日本 9/28)

シリコンバレーから遠隔授業を開始
起業家の精神育成 リーダーシッ
プ
(日刊工業 9/28)

トムソンサイエンティフィック
影響ある論文日本人十七人に中嶋直
敏工学研究教授
(日経産業 9/28)

医を診る 医学教育 実技経て学生
資質向上 吉田素文医学研究教授
(朝日 9/29)

大学のサテライトキャンパス
新博多駅ビルを検討 九大など
(日経 9/29)

九州大学アジア塾
中国ビジネスセミナー
(読売 9/29)

新刊「峠の歴史学」
峠の歴史 歩いて発掘
服部英雄教授(日本中世史)
(読売 9/30)

九大留学生と地元住民 料理教室で
交流 福岡市西区
(西日本 9/30)

メタボリックシンドローム
九大で公開講座
(西日本 9/30)



九大生が案内する 世界のキャンパス



安倍総理と仏教について、ウプサラの友人に伝える。

Uppsala University



ウプサラ大学

スウェーデン

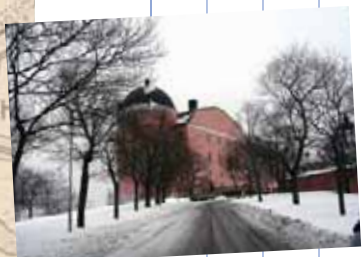
工学部 4年
安國 鉄平

交換留学先

やすくに てっぺい



真冬のウプサラ教会



真冬のウプサラ城



真冬のガムラ・ウプサラ

ウプサラ大学は conflict and research という紛争問題についての研究が盛んです。私の受講したクラスの中でもっとも面白かったのが、genocide and mass violence in the modern world という世界紛争に関するクラスでした。このクラスには、イラク出身で戦争を経験した学生や、イスラエルに行つてパレスチナ紛争について学んだ学生がいました。先生自身、人類学者として旧ユーゴスラビア紛争中、現地調査をするなど戦争体験を持つていて、実体験を交えた彼らとの討論では、戦争の持つ悲惨さをより正確に学ぶことができ、とても刺激的な授業でした。

一番苦労したこと、それは寒さと孤独に打ち勝つことでした。スウェーデンの冬はほとんど太陽が昇りません。朝の九時ごろから太陽が昇り始め、夕方三時にはもう沈んでしまつています。一学期の私のカリキュラムは週三回学校に行くだけで、それ以外はお休みです。勉強は学生の家庭学習に重点が置かれ、講義前に要求させるリーディングの量が膨大でした。授業は全く分からない、家で読む教科書も頭に入つてこない、仲の良い友達もなかなかできない、とどめの真つ暗で寒い天候。鬱病一歩手前で日本の思い出の写真を部屋に飾り、日本の小説を読む日々は、気分転換でベルギーに旅行に行く十一月の終わりで終わりました。その後、一学期の終わりにスウェーデン語のクラスのメンバーでテスト打ち上げをするとき、私とフランス人ブルーノの二人が主催しました。これをきっかけにブルーノと親友になり、二学期以降多くの友人を作ることができ、生活が充実したものに変わっていききました。留学生活で得たもの。それはなによりも共に勉強し、遊び、時にけんかをする友人ができたことだと思えます。

大学情報

ウプサラ大学は、首都のストックホルムから北西北に六十四kmのウプサラというスウェーデン第四の町にある大学です。一四七七年に設立された、スカンディナ비아半島で最も古い大学です。リンネ、セルシウス、オングストローム、ノーベルなどの有名な科学者を多く輩出しています。学部・大学院生は約四万人、博士課程の学生は約二四〇〇人とスウェーデンだけでなく、世界各国から多数の学生が学んでいます。大学周辺には、ウプサラ城や大聖堂など多くの歴史的建造物があり、また町の中心から北に5kmほど行くと、ガムラウプサラ(英語で Old Uppsala という意味)というかつての王が眠る遺跡があります。学生サポートは international office の Thomas がアジアからの留学生担当で、いろいろと助けていただきました。

交換留学について詳しく知りたい方は、「九大生のための海外留学情報」(<http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/intlweb/study/>)をご覧ください。過去の交換留学生による報告書も大学毎にたくさん掲載しています。

こんな本
出しました

音のデザイン



編著者：岩宮眞一郎（九州大学大学院芸術工学研究院 教授）
発行：九州大学出版会（2007年5月刊 2,400円）

著者から一言

音にもデザインがあり、デザインにも音があります。「音のデザイン」は、感性に訴える音のチカラを生かす術です。本書では、製品の音、サイン音、映像の音、サウンドスケープ、公共空間の音環境、音のバリアフリー、音楽制作などを対象とした「音のデザイン」技法を示しました。また、「サウンド・デザイナーの必要性、音に対する感性を磨く方法についても解説しています。本書を通して、「音のデザイン」の必要性、可能性、将来性などを訴えたいと思っています。



ここ 食卓から始まる生教育

編著者：内田美智子（助産師）
佐藤剛史（九州大学大学院農学研究院 助教）
発行：西日本新聞社（2007年10月刊 1,429円）

著者から一言

共著者である内田美智子先生（助産師）の話を初めて聞いたとき、涙が止まりませんでした。この人の話を、一人でも多くの人々に伝えなければという使命感を感じました。そして二ヶ月という異例のスピードで書き上げました。自分がいかに愛されて育てられたか。そして、自分の子どもをどのよう愛して育てるか。そしてその愛は食卓にあります。是非、社会に出る前に、親になる前に、大学生のうちに読んでほしいと思います。

佐藤 剛史

編集後記

平成十八年には73万2000人が結婚し（四十三秒に一组が結婚）、25万8000人が離婚したが（一分二秒に一组が離婚）、離婚率は二五八、〇〇〇÷七三二、〇〇〇＝約三十五％にはならない。その年に結婚したカップルが、その年に離婚したわけではないからである。広報において、このような数字のトリック（とレトリック）は重要であつて、たとえば本年の新司法試験における九大法科大学院の合格者は二十九名で、全国七十四校のロースクール中二十位であるが、しかし、法律学未修者の合格者数でいえば、早稲田、慶応、東大に次いで四位なのである。

研究紹介部会主幹・教授 七戸 克彦

ある日の箱崎キャンパスの事務局庁舎内での光景（音景？）。遠くから、「ゴオーウ」という高い音が近づき、その音は頭の上で更に大きくなり、次第に遠ざかっていった。その間十秒程度だが、会話中の声が一瞬とぎれた。こうした光景は日常的になつているが、なかなか馴れない。やはり九大の教育、研究、大学運営にとって、少なからぬ影響があるという実感をもつ。九大の発展に「静けさ」がどんなに大事か。伊都キャンパスへの移転が一日も早く完了するよう支援したい。

研究戦略課長 米澤 宏

毎年十月にはノーベル賞の発表が行われます。日本全国の受賞候補にあげられている先生方の周りには多くのマスコミの方々が情報網を張り巡らしているようで、関係者にとっては期待や不安など様々な思いが交錯する時期となつていようです。日本政府が「五十年間で三十人のノーベル賞受賞者を」と目標を出しているのと同じく、この九州大学からもノーベル賞受賞者が出る日はそう遠くないのではと期待しています。

総務部広報室 大坪 豊和

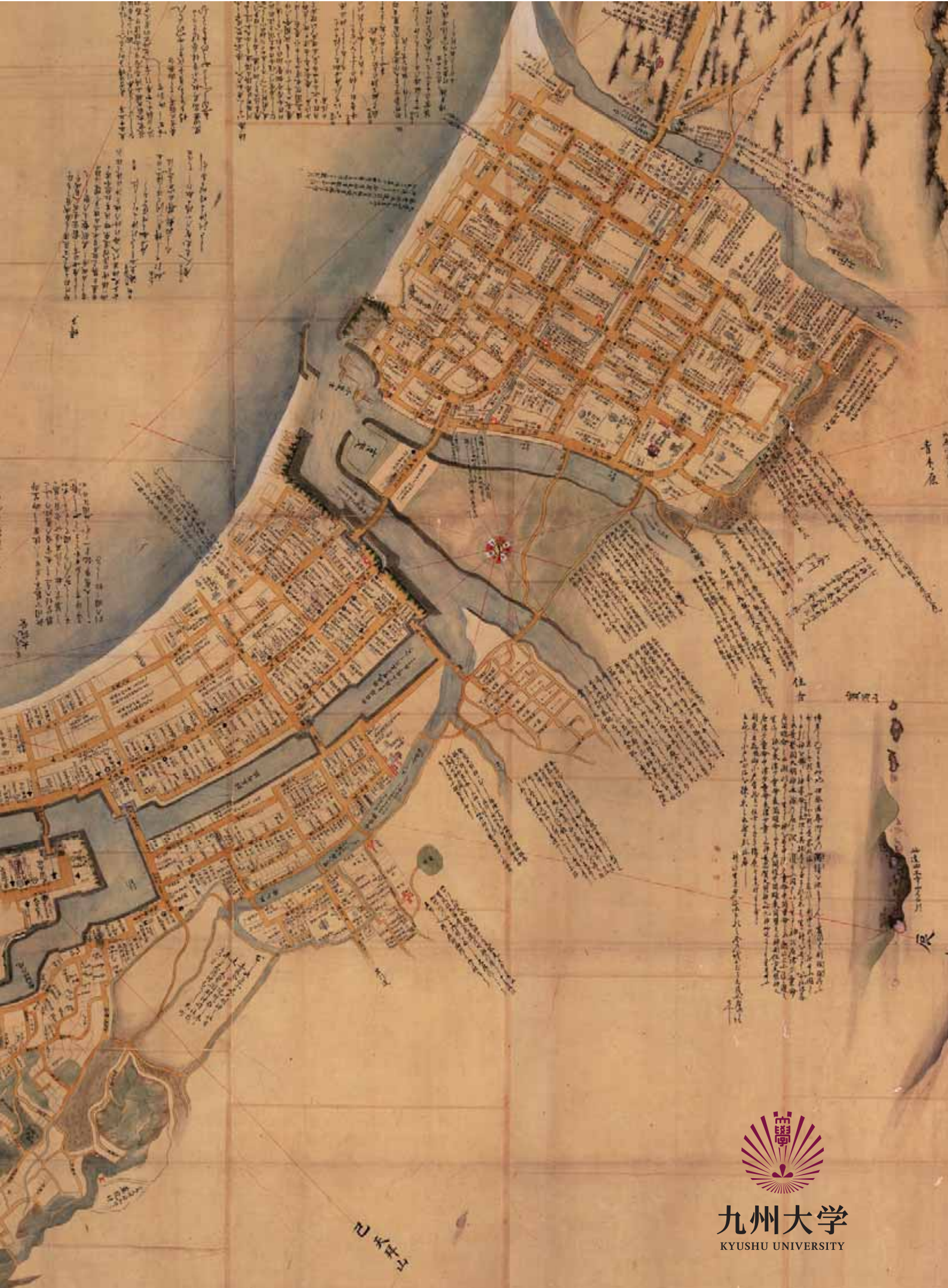
九大の最新情報は 「九大広報」の定期購読で。

九州大学同窓会連合会では、九州大学の姿をご理解いただくため、同窓生や在学生のご家族の皆様をはじめ、広く一般の方々にも「九大広報」の定期購読をお願いしています。定期購読は一年間六巻分（隔月発行）三千円でお受けしておりますので、ご希望の方は、同窓会連合会事務局までご連絡をお願いします。

九州大学同窓会連合会事務局

TEL.092-642-4328 FAX.092-642-2113

E-Mail alum.uok@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp



九州大学
KYUSHU UNIVERSITY